二-34

応用心理学論文集

[第1集]

[10]11-13回 [14回]

日本応用心理学会大会

研　究　発　表　報　告

大体育大学図書館蔵書
昭 61. 4. 28
133826

日本応用心理学会

140.4
N77
V.11=13

目次

はしがき……一
日本応用心理学大会
第十一回研究発表報告……三
第十二回研究発表報告……三八
第十三回研究発表報告……六七
補遺……九六
日本応用心理学会・関西心理学会
連合大会研究発表報告……一〇三

はしがき

◆この研究抄録は、日本応用心理学会第十回、十一回、十二回、十三回大会で発表されたものである。その期日および会場はつぎのとおりである。

第十回——昭和二十五年十一月　学習院大学
第十一回——昭和二十六年七月　千葉大学
第十二回——昭和二十六年十一月　東京学芸大学
第十三回——昭和二十七年七月　横浜国立大学

◆従来日本応用心理学大会での研究発表報告は、教育心理研究、人間科学などに掲載されてきたが、戦争中あるいは戦後の出版事情のため、永い間中絶されていた。第十回大会の総会にはかり、その後のものをまとめて出版することとなり、委員をあげて準備をすすめ、昭和二十七年十一月、とりあえず第一回——第十三回までの「研究発表項目一覧」を刊行した。

◆総会の都度、会員によびかけ、抄録の提出を依頼したが、全部をそろえることはできなかった。またなかには、制限枚数をはるかに超えているため、やむをえず削除しなければならなかったものもある。編集は、大会ごとに、通し番号をつけ、発表順に配列し、内容による分類は行っていない。

◆この報告ができ上るまでに、東京十仁病院長梅沢文雄氏からは刊行費にあてるための多額の寄附をいただき、出版については中山書店の好意を、また校正については川村短大助教授島田一男氏他の奉仕的な努力をいただいた。記して心からの謝意を表する次第である。

なお今後は、一カ年ずつをまとめて刊行する予定である。

昭和二十八年七月

編集委員　小保内虎夫
　　鈴木清
　　松村康平

第十一回大会

昭和二十六年七月　千葉大学

小学生の興味

――校内活動に対する関心の調査――

上田　敏見

こゝに報告するのは、私が本年一月下旬、奈良県下の二地域（山間部及び平坦部地方）の四ッの小学校児童二年生以上、男女合計九二〇名を対象として行った興味調査の一部である。即ち、小学生が校内に於て、「一ばん好きなこと」、「一ばんきらいなこと」として挙げることを求められた際の回答を整理したものである。質問紙法を用い、無記名で回答を求め、「自由な気持で、感じたまゝを正直に記入するよう、また厭なら書かなくともよい。」との注意を与えた。このような問い方によって、多少プロジェクティヴな意味をもたせることが可能であり、かくして、彼等が校内における、いろいろな活動の中、どんな面に関心をよせているかの大体の傾向を見出そうとしたのである。

この調査は survey であって、見出された結果の主要傾向の底にある motive は、改めて臨床的分析をなすべきものと思う。

結果の概要を述べると、小学校の学童たちの最も関心している活動は、教科学習活動で、「好きなこと」、「きらいなこと」共に群を抜いている。「好きな」方にあげられている率は約八五％で、「きらい」なこととしてあげられているのは約四八％、教科の中でも skill 的な算数、国語が一ばん興味をもたれているようである。

算数、国語、社会、理科の如き基本的教科を好むものは、平均して、之等を「きらい」とするものの二倍に達し、発達的にみると五年生まではその興味が増大し、又学年のすすむにつれて好悪の差が著しくなっている。

体育、スポーツに関する面では、男女差が著しく、殊に高学年で一そうハッキリと現れている。男子には興味をもたれ、之を「好きなこと」としてあげているものは、「きらい」とするものの二倍以上の％を示すが、女子では、きらいなことの方に多くあげられている。

特定の教科名をあげないで、「勉強」とか「学習」という様な、好悪の表現をするものは、低学年に多く、どちらかといえば、「好きなこと」を述べる際に多い。高学年になると、かかる不定表現が減少するが、これは興味の方向が明確化したからであろう。

音楽、図工等、芸能科は、一般に関心が低く、殊に男子、又、山間部の児童に於て低い。又、学年がすすむと好まれなくなるようである。

家庭科は著しく不評で、関心は微々たるものである。教科学習以外の、ノン・アカデミックな活動に対する関心、例えば、自治的活動、対人関係などの面への関心は、かなり見られるが、積極的興味というべきものは見られない。このような活動に、真の興味を見出すようになるのは中学生以後であろう。

全般的にみて、山間部の小学生はその興味が主要な二三の教科学習に狭く集中している傾向がみられる。「全体としての児童」の豊かな興味は見出されなかった。

要求水準変化の個人差

岩田　茂樹

一、問題　場面が異るに従って要求水準も変化するが、変化の仕方には非常な個人差のあることが観察される。この個人差を規定している要因の一つとして、適応機制の型が考えられる。

二、方法　被験者は小学校五年生。要求水準実験としては次の二つの方法を用いた。(1)クレペリン精神作業検査を毎週一回ずつ連続五回集団的に実施し、最初の回を除き各回とも作業に入る前に前回の作業の各人の得点、クラスの平均得点、及びクラス平均得点にくらべて各自は、非常にすぐれていたか劣っていたか、ややすぐれていたか劣っていたか、大体平均に近かったか、の五段階に品等した結果を報せてから、今日も亦同じ加算作業をするが今日は何点とることが出来ると思うか各自にその目標を設定させた。(2)積木デザインを用いた個人検査で、連続一四回、各検査が終った直後に何秒で出来たかを実験者から報され、次の目標を述べるのであるが、その目標を述べる前に、上位群、同位群、下位群の標準成績をあたえられることによって、各群の上或は下にある社会的面が実験的につくられた。

三、結果の要約　(1)、適応せるパーソナリティ構造をもつ子供の要求水準はその実験場面の変化に応じてD1得点は正或は負の方向に極めて僅かの値を示す。即ち、過去の自分の実際の成績に近い所に目標を設定する。自身の実績を反省自覚し、成功失敗の誘意性に影響されながら、その可能性を知性的に洞察して、妥当な、実現可能な目標を設定し、しかもその達成に向って自信をもって努力する態度が観察された。(2)、非合理的な適応の習慣を身につけている子供にはこれとは異った要求水準の変化がみられ、しかも適応機制の型が異るに従って要求水準変化の様式も異ってくるのが観察された。例えば補償的な防衛機制型や白日夢的な逃避機制型の子供は、その実力を無視して実現不可能な目標を設定し、その目標に向って真面目に努力することなく全くでたらめな作業振りで、とに角外面を一応糊塗し、劣等性を補償しよう

とする。又、或る孤立的な逃避機制型の子供は、過去の成績能力からいつでも極端に低い所に目標を設定し、より高い目標を追及することには全く無関心を示した。拒否的な子供は、要求水準実験において次の目標をたてることに殊更に抵抗し、考えることもせず、実験者が強いるとしぶしぶと前回の成績をそのまま目標とすることも観察された。

以上の事例から、適応機制の型と要求水準変化の型との間に或程度の積極的な関係があることが予想される。

自己診断の一考察

松村康平

(1) a、「自分による」自己の性格診断。b、「自分による」他人に反映していると思われる自己の性格診断。c、反映していると仮定した「他人による」性格診断。

(2) a、とb、の一致・不一致から、乖離的性格その他の性格診断に役立てる。

(3) 反映していると仮定した他人、即ち、友人と両親に、直接きき、友人及び両親による診断と、自己が、友人及び両親に反映していると考えられる自己の「自分による」診断との「ずれ」具合をみて、友人及び両親と自分との間の理解度を、測定する。

(4) 青年期には、青年に関する両親の理解度が低く、友人の理解度のほうが、高く感じられたりするが、青年の思うほどには両親の理解度が低くないことを、この実験結果は示していた。

児童の人格性についての用語に見る人間理解の発達的研究

後藤与一

子供達は互に相手の人格性を何らかの程度で理解して、或は好ましい人格とし或は好ましからぬ人格として交友関係を続けている。この現象について、その理解の程度は年令的に如何なる発達の様相を示すか、性別的差異、都市と農村との相異はどうか、を調べようとするのが当研究である。

調査方法は無記名式質問紙法によった。問題は「あなたのクラスで、あなたはどんな人を最も好みますか」或は「嫌いますか」の二箇である。実施期間は本年の五月上旬（農村）六月中旬（都市）調査校は奈良県下の農村小・中学校、大阪市中心部小・中・高等学校各一校である。小学校一年を除き各校各学年一学級ずつとり、人員は農村三七〇、都市五三九、合計九〇九名である。

整理としては先ず、人格性に関する用語の数的発達と用語の質的変化とを見るために、前者については用語数並びに用語使用度数の整理を、後者については用語の分析を行った。用語数は、同義語であっても異語は全部取挙げた。用語使用度数は各学年男女同数の人員に換算して示すようにした。用語分析は次の三種の基準によって行った。

1、用語の具体性、抽象性
2、自己中心的評語
3、文部省生活指導要録の人格性目録

更に中高校生について使用度数の多い語を上位から一個取挙げ、男女差、中学生と高校生との差異、好ましい人格性についての用語と好ましからぬ人格性についての用語との比較の為の整理を附加した。

このような整理によって次の如き傾向を知り得た。

1、人格性に関する用語数は小学校四、五年並びに中学二年を頂点として、その前二、三年間急カーブを示しながら増加する。

2、用語数から見た都市児童と農村児童との差異は中学一年から明確になり前者が優位である。

3、用語は年令的に量的に増大すると共に質的にも向上する。

4、人格性目録の各項目についての分類がより広範になるのは高校二年生頃からである。

5、低学年児童は相手の人格を多くは自己中心的に把握し具体的に表現する。ところが次第に発達して両傾向とも小学校三、四年頃より減少する。

6、明朗性については中学一年より急激に増大し、高校一年が最高である。

7、青年期の好嫌の両極は次の四種に最も多く現われている。

親切—利己的　明朗—陰気　尊敬—軽視
正直—不正直

眼瞼交互開閉能の年齢的推移

——附、精神発育制止者の同能力——

山内美子

（一）序

眼瞼交互開閉能力という随意運動は、精神生理学、応用心理学、乃至、労働科学上色々の問題を含むが、それが素質的なものか、児童の発育に応じて、眼瞼開閉という反射運動から分化するものかを知る目的を以て本研究を行ったのである。

（二）調査方法並に対象

検査者は広島女専生徒を使用し、家系的調査のためには、広島女専の他、三つの高等学校の生徒家族一五六家族を、個人調査のためには、中学校、小学校、幼稚園、孤児収容所、托児所の五カ所の施設の児童一、四五五名を。尚参考の為六方学園の精神薄弱児（六—八才）四五名。県立盲学校生徒（六—二八才）七三名。養老院の老人（六〇—九六才）二四名を用い。開眼状態より各眼瞼を別々に閉じ得るか、閉眼状態より逆に別々に開き得るかを検し、完全、不完全、不能等に分けた。（二一才以

上の者四五二名は、家系調査によるものと養老院の入院者とを合わせたものである。

(三) 検査成績

Ⅰ 完全機能分化者は被検者一九〇七名中、六一・七%であるが、男女差は認め難い。

年令による分化度の推移は著しいものがあり、六才以下は僅少、七—八才に於て稍増加し、九才以上に及んで一層増し、一〇才以上に至って急増（八五二名で五八・五%）、青春期よりは更に分化して、Plateau を示し、老年に入り再び減少する。

Ⅱ この機能の不完全分化者は総数一六七名で、六九・八%の多きにのぼる。

Ⅲ 不能者は総数五八名にして、全数一九〇七名中二五%にすぎず、而もこれらは圧倒的に八才以下に多く四二名を算し、七・二%を示す。一〇才以上は極めて少く、老年に於て再び増加する。

Ⅳ 動眼神経支配（閉瞼時左右交互開瞼能）のものは（三二名で二・二%）顔面神経支配（開瞼時左右交互閉瞼）のもの（五四名三・七%）より分化しにくい事を示す。

Ⅴ これらの機能が完全には分化せず、左右何れかにおいてのみ可能なもの八二名五・六%を示す。

Ⅵ 精神薄弱児四五名は、完全可能者四名、八・八%になるに反し、不能者一九名四二・二%、閉瞼可能開眼不能者は三名六・六%に止り、他はこれらの機能が極めて不全な者が圧倒的である。

そもそも、こういう中枢神経機能は孤立して進展するものでなく、他の機能の分化につれて又分化するものであろうから、必ずしもそれ自身の機能の必要性のみによって分化するものでないかも知れない。これらは精神薄弱者に於て分化せず、年令と共に分化し、老年に於て退化している事から窺われる。

終りに臨み御指導を賜わった広島医大精神神経科教室小沼教授に深甚なる感謝を捧げる。

近視の予防に関する教育心理学的研究

妻倉昌太郎

従来、近視は専ら医学者によって研究せられ、眼鏡装用による視力矯正がなされて来た。然し、予防医学が重要性を加えて来たのにつれて、視力矯正と同時に、その予防に重点がおかれなければならなくなった。こうして近視予防の問題は、学校、家庭へと移らなければならない。教育心理学の対象としての近視問題がここに生れて来る。

近視の原因として従来から Ponders によって唱え始められた遺伝説と、H.Cohn 等の主張する近業説とが対立している。なお近業が何故近視を導くかに関しては調節説、輻輳説、重力説その他がある。然しこの何れか一方のみを正しいとすることはできないようである。近視眼となった原因について近視眼者八二三名から内省をとってみた所では近業、眼の過労、遺伝等が挙げられるのである。

近視予防には作業の距離、作業時間、文字の大きさと形態、採光と照明、全身の健康、眼鏡装用の問題、遺伝関係などの諸条件を考えなければならないが、私は主に作業距離（近業）について調査した。

調査Ⅰ 近視者の方が正視眼者より近い距離で作業する。某小学校六年女児四三名（内近視八名）について作業距離を遠い、やゝ遠い、普通、やゝ近い、近いの五段階に分け夫々5、4、3、2、1の評点を与えることとし十五回観察記録した。結果は一人平均正視眼児三六・九、近視眼者三一・八である。矯正眼鏡を装用してもなお近いのは眼鏡装用前の習慣にあることが多いのではあるまいか。

調査Ⅱ 作業距離は作業の種類によっても違う。児童の学習作業二十六種につき調査Ⅰの場合と同様五段階に分けて父兄の観察した所を記入させたが、一般に近視眼児童の方が正視眼児童より作業距離が近い。然し作業の種類別の傾向は両者に於て殆ど一致している。辞書を引く時、書取、綴方、刺繍などは特に近くなり易い。

調査Ⅲ 姿勢を正すことによって作業距離を遠くできる。よって某小学校六年女児童四四名について姿勢を正す目的から一週間を単位として次の諸条件と累加的に与え、前記と同様の方法によって毎日作業距離を観察記録した。

第一週 前後径三一・五糎の机を手前へ約十度傾斜させる。

第二週 腰掛の倚靠に腰を紐で固定する。

第三週 腰掛に蒲団を敷いて差尺を小ならしめ且つ足の下に煉瓦を置く。

第四週 同右

第五週 机上手前左側に小扇形を画き左掌をこの位置に置いて固定し肘を腰掛に倚靠に紐で固定する。

平均評点は週を追って上昇し、調査前一人一回平均評点二・五であったが第五週には三・五となった。第六週には平均三・〇に達しない姿勢不良児六名に対し胸にランドセルを懸けさせた所平均四・二と上昇した。

問題受刑者（暴行型）の精神特徴（Ⅱ）

宮田義雄
百枝繁久

一、目的——問題受刑者を分けて暴行型、自傷型（自殺を含む）、逃走型、煽動型、同性愛型、小反則頻発型の六種とする。この他に災害型があるが、これは作業面のもので、所内の治安に直接関係がないので、この中にも含まれない。

本報告は第一報において以上六型を総括調査した欠点

を改め、暴行型のみを対象とした。目的は所内の治安を保つため、かかる受刑者の早期発見と、その処遇の方法を確立せんがため彼等の真の姿を描き出すことにある。

二、方法――懲罰簿により二五年九月より二六年六月に至る間に喧嘩、暴行等を行った受刑者中、初犯以来、或は幼少時よりかかる傾向を有している者二六名をえらび、対照群二〇〇名と比較した。

三、結果――今刑のみの事犯をみると総件数七三件。一人平均三件弱で最高七件。内容は喧嘩一五件、暴行二六件、反抗一一件で全事犯の七一・六%。この数は服役期間中のこととてまだ増大するみこみである。盗癖、家出、不良交友等の開始時期は平均一七才弱。対照群の平均一七才六月と比較して特に早いとはいえないが、初犯年令平均二〇才六月で対照群より四年早い。これは問題受刑者の方が悪化速度が遙かに早いといえよう。初交年令は一七才強で対照群より二年程早い。交身は対照群の二八に%対し、四六%を示している。犯罪発生期を二五才を中心にして早発、晩発に分けると早発犯罪は九二・四%となり、対照群の六四・五%に比して、早発犯罪が圧倒的に多く、犯罪の傾向は六六・四%が多傾向犯罪者である。

生活歴は調査未完のためここには省略する。

主な身体歴は失神を伴った頭部外傷は対照群の一〇%に対して二〇%弱、性病は同じく三五%に対して五四%、ヒロポン、モルヒネ中毒は五%に対し八%、脳膜炎は対照群五%で問題受刑者には皆無であった。なお、問題受刑者中には癲癇と診断せられた者が一名ある。

智能は田中B式短縮版を用いた。偏差値平均三六・二となり、対照群の三四・八と比較して殆んど差がなく、寧ろ高い位である。従って智能は問題受刑者発見の手掛りとはなり得ない。

性格に就いては問題受刑者は全員精神病質人とみられる。即ち、発揚性五〇%、爆発性四二%、無情性、弱志性各四%、クレペリーン検査によれば病的曲線のfp、pが八四・七%で、対照群の夫々二・五倍弱、三倍に達している。ここに我々は問題受刑者発見の重大な手掛りを発見する。

以上により我々は暴行型の極めて粗笨な輪廓を描き得たにすぎぬが、更に研究を進めるならば、彼等の早期発見とその適切なる処遇法の確立は必ずしも不可能ではないと思う。

施設収容児童の家庭に対する態度

大野　桂

一、目的・方法・対象

本調査の目的は児童福祉施設に収容されている児童達の特殊な心理の一としてその家庭に対する態度を明かにし、それによって彼等の指導上の手掛りを得ようとするにある。対象は千葉県下の各種施設の児童計四四九名、年令は小学一年以上高校の一部、方法は質問紙法、正確を期する為、単独記入は小四以上、それ以下は指導員の問診による代理記入。

二、結　果

㈠、まず家庭に対する過去の態度。これは(1)「此の上なく楽しかった」とするもの48%、(2)「大して楽しくもなかった」31%、(3)「いやだった」15%、無記6%。(1)は「家中が一緒に暮せ」「親に可愛がられ」「友達がよく遊んでくれた」から、(2)は「父母がいない」「其の為生活が困難」「いても病気」「家の人に叱られた」「友達に恵まれない」から、(3)は「叱られた」「いじめられた」「親がない」からというのが多い。

㈡、次に家庭に対する現在の態度。これは(1)「大して考えない」が多く、(2)「堪らなく恋しい」及び(3)「考えただけでもいやだ」のような極端なものは割合少い。而して(1)は「学園が面白い」「家庭がない」「家が面白くない」「帰っても困る」場合に、(2)は「親兄弟と一緒に暮せ」「親を憶い」「可愛がって貰えた事を憶い出す」「現在の施設の生活に慣れない」「不満がある」「旧友との交際を希む」場合に、(3)は「家でいじめられ」「面白くない」「家がない」「学園が面白い」場合に考えられている。

㈢、更に学園に対する現在の態度を通して、対家庭態度を窺うと、約60%が学園生活を好み、然らざるものはその半数にすぎない、といって無条件に学園生活が喜ばれているのではない事は「ここがいいから」「友達と離れ度くないから」「他に世話になる所がないから」等を筆頭に「学園の先生が面倒をみてくれるから」「帰っても面白くないから」等の如きやや消極的な理由の挙げられていることにより明かであり、更に好まない者の挙げる理由に「家の人と一緒に暮し度い」「皆にいじめられる」「面白くない」「飽きて来た」等のある事により、考えさせられるもののある事を認めざるをえない。

㈣、最後に彼らの将来の家庭復帰に対する態度は、その可能・不可能の如何にかかわらず、65%が家庭復帰を願い、残り35%の内、大多数が之を拒み、更にその残りが無記となっている。しかるに実際の可能性を当ってみると、復帰を希む者の内僅かに16%だけがやや可能性をもち、残り84%は皆目可能性がない事、又復帰を願わぬ者の5%だけが復帰の可能性があり、残る95%はこれ亦可能性のないものである事を考える時、如何に彼等が深刻な理想と現実の相剋に悩み、癒す事のできぬ悲しみに悩んでいるかが分り、いよいよ以てこの種児童発生の温床たる破滅家庭の事前の防止並びに収容施設の徹底的家庭化、幸福化を計る事の必要を痛感せずにはいられない。

精神遅滞児の文章構造（要旨）

千葉　富士雄

一、調査目的

児童の作文を通し文章的表現と精神的充実度との関係

を研究調査する。

二、方法及び被験者

昭和二六年四月下旬に実施した遠足に就て五年生三〇〇名に作文させ、その中から上位群児童一〇名と下位群児童二〇名の作文を有意抽出して標本作文とした。標本作文を一定の原則のもとに分析整理し、両者の比較を容易にした。（分析基準省略）

三、分析結果及び考察

上位群作文と下位群作文の主なる差異は次の三点である。

(イ) 下位群作文には文章の羅列が多く、同一事実のくりかえしが頻繁である。

(ロ) 自然描写の記述が少い。

(ハ) 文章は現在に於ける自己を主体にしたものが多く、友人に就て叙したものがこれに次いでいる。

以上三点に就て心理学的に考察してみる。

(イ) 下位群作文に文章の羅列が多いということは、上位群児童では体験が客観性を持って分節して対象性を持っているのに反して、下位群児童ではそれが弱いから記憶を再生するにしても順序立てて理論的に想起する事が出来ず、ふと思いつくままに順序かまわず配列するからである。

(ロ) くどく書くという事は、思考の訓練が不充分なために有用無用の区別が立たず、要点だけを簡潔に事態に応じて述べる事がむつかしいからである。

(ハ) 下位群作文に自然描写の記述が少いという事は、彼等にとって風景というような外的な存在、就中その美というようなものはさほどの関心事ではないからではあるまいか。

(ニ) 下位群作文に過去と未来に関する記述が少いのは、彼等の欲求が弱く、現在の事態からぬけ出そうという動きが少いからである。これは一つには更に彼等の世界が未分化であって高度の構造を持っていないところから来るのであろうが、とにかくあたえられた現在にいわば満足し切っているからであろう。

(ホ) 下位群児童は他者の心情を推測して感想を記述することが少く、自己のことばかりに終始するがこれは自己中心の域を脱していないからである。

なお友人を主体にした叙述が多いということは、一人称が単数の我的というより、複数の我々的だからである。即ち彼等には友人に属する事柄を自分に対立する他のものとして立てる態度が明確でないのである。それ故自分と同等だという感じの強い仲間のことを自分を述べると同様に屢々述べる一方、同じ側近者でも教師の事になると「我々」の中に入らないからこれを主体として述べる事が少くなるのである。

（註） ここにいう精神遅滞児とは所謂出来ない子供の意味に解釈しておく。

脳ロボトミー手術前後

その他における置換法精神機能検査の成績

矢野正敏
三木清子

私共は内田クレペリン加算法の加算の代りに数字に相当する記号を附けさせる方法を考案し、置換法と名付け数回の発表を行って来たが、このたびは脳ロボトミー手術前後に行った成績を述べる。

(1) 脳ロボトミー前後に行った置換法精神機能検査の成績よりみるに、精神分裂病の中、緊張病においては、術後検査の成績が一時よくなるようである。然し、その後又再び術前の如き成績に戻ることもある。破爪病型の者は術後一ヵ月位は作業量の増加を来すが、三ヵ月以後はかえって低下する。誤謬は術後一般に減少する。

概して、破爪病の者よりも緊張型の者にロボトミーの効果が伺えるように思える。それは緊張病型の意志の抑制を除く事にロボトミーの効果があり、その為に、検査成績の向上、或いは、不能であったものが検査可能になると考えていいのではないかと思える。

この考えをうらづける如き顕著な例が次に示すものである。

(2) 精神分裂病、緊張病の一青年、自殺念慮、緘黙、拒絶症、内閉症状のあった者。検査を行おうとするに逃げだして不能。これにイソミタール〇・五瓦を静脈注射し、意志の抑制のとれた状態で問診すると、疎通性を生じ流暢に生活歴をのべる。

置換法検査の結果は、曲線型正常、作業量も平均四三で健康人と同じ状態である。

イソミタール・インターヴューの結果、知りうることは、この患者は、知能の欠陥でなく情意の面にある病的抑制によって置換法検査も不能なのであることが分る。

(3) 上の患者にロボトミーを行い、その後検査を行うと検査可能であり、作業量二五、曲線型平坦である。それは自発性なき者によく現われる曲線である。平常の行動としては、身の廻りの始末、談話が僅か可能となり、自己の病的体験を医師に訴えるようにもなったが然し、概ねは、内閉性の強い状態である。イソミタール〇・五瓦を再び注射して、インタービューを行うと、活潑に答え、正常な手紙もかく。

置換法検査を行うと、作業量二四、曲線型も平坦である。

以上のことからこの患者を考えてみるに、術前意志の病的抑制によって、内閉性、緘黙、拒絶症を示していたのであって、その抑制のとれた状態では、健康人と変らない状態でありうることが、置換法精神機能検査によって伺える。

この患者にロボトミーを施すと、病的意志抑制が、比較的恒常的にとれるが、置換法検査成績によって窺える

ことは、自発状の低下と考えるべき状態である。イソミタールを注射すると、更に抑制がとれて、談話が活潑になるが以前の時よりは、低調である。置換法検査を行うと、作業量が以前より低下している。

(5) 結　語

a、ロボトミー後には、漸次切られた白質繊維の及ぶ範囲の視丘、前頭葉前部の細胞が脱落し、これが高等な思考構成低下、自発性低下を来すといわれているが、十数例の置換法検査の成績よりみて、術後一ヵ月位で作業量の上昇する者あるは手術後の盛んな修復機転の現われとして精神作用が活潑になったものであり、術後三ヵ月以後の成績の低下は、当該脳灰白質細胞の崩壊による自発性低下を中心とする精神機能低下の現れであろうと思われる。

b、緊張病者に対しては、ロボトミーは、情意緊張、自我への過敏性を除いて衝撃的な精神異常の恢復を来すものと思える。但し自発性の低下は免れない。

c、置換法精神検査は、以上の如き精神状態を認識力、情意の様態を中心として、映出出来るものの如くみえる。尚精神病者においては、数的な検査の処理と共に検査の場に対する全体の反応をみてゆくことが大切である。

幼児の知覚と行動研究（V）

——幼児の模造及び模写に於ける鏡映的表現について——

勝井晃
小保内虎夫

幼児の描画表現等に於ける変容 Verlagerung の現象は古くから注目された所であるが、特に鏡影文字（Spiegel schrift）現象としては既に一八九〇年 Soltmann によって指摘されそれ以後描画表現上に於ける変容現象としては Stern, Katz, Volkelt, Brukhaldt, 等一群の研究が見られ我国でも児玉省氏小林さえ氏等はこの問題について取扱われている。本研究は、この問題をとり上げ特に次の三種の簡単な作業における表現形式中に現われた鏡映的表現について検討して見んとしたものである。

(1) 二本のマッチ棒によって形作られる簡単な幾何図形の模造に現われた左右対称の鏡映的表現についてのケース。f(1)参照。

(2) 簡単な線分図形の模写に於ける鏡影的模写についてのケース。

(3) 「異方向同一図形」の認知の際に見られた左右対称方向の誤りについてのケース。

この結果いえる事は

(1)に於ては客観的形態を正確に表現出来ず変容を来したものの中鏡影的表現をしたものは 14/40＝35%

(2)に於ては変容図形が非常に多く全体の六五%も出たが　この中鏡影的表現を見たものは 21/323＝6.5% に過ぎなかった。

(3)に於ては(1)、(2)の如く操作的表現ではなく知覚的同一方向判断（瞬間露出器による）であるが、この場合、鏡映的な左右逆方向を同一方向と誤ったケースは各国形とも非常に多く平均五〇%近く見られた。

結論としては幼児に於ける（この場合は三才より七才迄）方向の知覚、判断、及び操作的表現に於て左右両方向の所謂鏡影的（或は Symmetrie）な方向の誤りが顕著な一つの type として、しかも各場合共通なものとして認められ、一つの知覚、操作に於ける幼児の特徴を示すものと思われる。

尚この現象の知覚的及び器質的原因がいずこに求められるかは今後の問題であるが、特に知覚的原因としては幼児に於ける視知覚の場に於ける左右方向の未分節、更に器質的根拠としては大脳（視覚領域）における左右両半球の Localization の生理的機能の未発達未分化によるものではないかという点があく迄 Hypothes として考えられる。

Small group における幼児の社会的行動に関する実験的研究

——主として Aggressive, Defensive Behavior——

田中熊次郎

一、目的及び方法

Menber を三人又は五人とする small group において、幼児達の「争い」の発生を解明し、幼児の社会的行動の現実様式を考察してみたい。今までの研究で、Frustration-aggression theory の仮定が正しいと考えられる。そこで、Play-situation を、ぬり給、絵本、双六、積木等と変化し、更に、男女別の Random group を構成して研究すると共に、その各々の group の中から、Aggressive group と Defensire group を構成して、比較研究を行う。特に、Observation-room を準備して、幼児達だけの世界をみようと試みた。

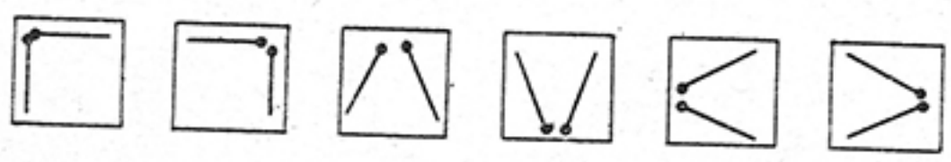
各グループの play の時間は、十五分間。

各幼児は、胸につけたリボンの色によって記録され、個別の行動特質も考察された。

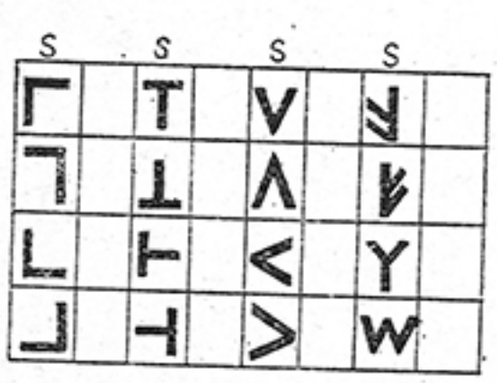
二、結果及び考察

(1) 男児は女児より「争い」が多い。それは、三人 group, 五人 group, ぬり絵、絵本、双六、積木等、実

Fi(1)



Fi(2)



Fi(3)

験のすべての situation を通じてみられた。

(2) 三人 group と五人 group との比較は、これだけの実験からはまだ明かではない。例えば、男児の双六の play-situation では、「争い」の頻数五人 group では M、九・四 となり、三人 group では六・四となるが、同じ situation でも女児では、五人 group 三・八、三人 group 三・九となった。

(3) Group を構成する member を変化した場合、即ち、この実験では、Random group と Aggressive group 及び Defensive group との比較であるが、この結果も一般的にはいえない。三人 group 双六の situation では、男女そそれに、Aggressive group > Defensive group > Random group の順に「争い」は少いのであるが、五人 group 積木の situation では、Boy aggressive > Boy random > Girl raudom > Boy defensive > Girl aggressive > Girl defensive となった。更に、実験回数を重ねる必要があろう。

(4) Small group 内の、各個別の幼児が示す Aggressive-denfensive behavior の現実様式は、およそ次の七種である。

第一 どの situation でも aggressive なもの

第二 Dandom group では aggressive, Aggressive group ではおとなしくなったり、かえって defensive となるもの

第三 どの situation でも defeusive なもの

第四 Randon group では defensive, Defensive group では Aggressive となるもの

第五 Random group では defensive, Defensive group では元気を出して、明かるくなるもの

第六 ぬり絵、絵本、双六、積木等の play-situation が変化すると、それに従って行動が著しく変化するもの

第七 どの situation でも、「争い」をしないもの

(July 14, 1951)

児童の賞罰

計夫 関

一、調査手続

昭和二十五年十二月信大附属小中学校生徒一二〇三名に、次の調査をした。

(一) あなたは最近叱られた事がありますか。
1、誰に叱られましたか。
2、どんな事のために叱られましたか。
3、何と言って叱られましたか。
4、その時どう感じましたか。

(二) あなたは最近ほめられた事がありますか。
1、誰にほめられましたか。
2、どんな事のためにほめられましたか。
3、何と言ってほめられましたか。
4、その時どう感じましたか。

二、結果

(一) 賞罰の数

第一表

	賞罰共にある者	賞罰共にない者	賞のみの者	罰のみの者
一小	82.7%	0	16.3	0.8
二	89.0	0	8.6	2.3
三	87.4	0	8.6	3.9
四	88.4	0.8	9.9	0.8
五	87.5	0	10.7	1.7
六	69.9	0.8	3.5	25.6
一中	48.5	7.3	8.8	35.2
二	35.5	10.2	6.5	47.6
三	56.9	5.3	0	37.6

即ち賞罰共にある者頗る多く、殊に小学生は然りである。之はわが国でも欧米のように幼い者が相当に厳しく取扱われている事を示している。併し、ほめられるだけの者は小五以下に多く、叱られるだけの者は小六以上に多い。「叱るよりほめよ」との常識は小学校では守られているが、中学生ではそうでない。

(二) 賞罰を与える人

賞罰共に小一より中三を通じて、母が賞罰を最も多く与えている。次は父である。青木誠四郎の調査によると、叱責者の頻数は先生、父、母の順になっている。従って、現在の先生は以前ほど叱らないかも知れない。二人以上の家族がほめるのはよいが、叱るのは望ましくない。

第二表

	賞める人%	叱る人%
父	一四・四	一七・五
母	五〇・二	四五・二
兄	一・七	四・六
姉	二・三	四・一
家人	四・二	二・六
二人以上の家人	一五・八	七・五
隣人	二・七	一・五
友人	〇・六	〇・八
先生	六・四	一三・一
巡査	〇・二	一・二
他人	一・一	一・四

(三) 叱責の理由

第三表

	一、権威又は規則の侵犯	二、勉強態度の不良	三、他に対する不行跡	四、不道徳	五、不整頓	六、無作法	七、動作緩慢又は遅延	八、過失	九、健康に不注意	十、その他
一	19.2%	10.5	17.5	1.7	4.3	26.3	5.2	9.6	1.7	2.6
二	26.2	12.7	11.0	0.8	6.7	22.8	6.7	8.4	0	4.2
三	25.7	14.2	14.2	0.9	8.5	18.0	5.7	7.6	0.9	3.8
四	51.3	13.9	10.4	0.8	9.5	6.9	5.2	4.3	0.8	0.8
五	34.4	12.8	16.0	0	7.2	14.4	3.2	8.8	2.4	0.8
六	32.1	10.4	15.6	0.8	12.1	6.0	17.4	4.3	0	0
一	33.5	26.4	12.1	0	5.0	7.1	7.1	6.4	0	2.1
二	29.8	16.1	18.4	0	3.3	9.8	7.1	4.2	2.8	9.0
三	20.6	18.0	8.6	0	11.3	14.0	14.6	3.3	2.0	7.3
計	30.0	15.3	13.9	0.5	7.2	13.3	8.1	6.1	1.3	3.9

権威規則の侵犯が最も多い。(他は省略)

児童の家族品等について（続報）

辻　正三

前回の本学会大会において我々は、東京都内某小学校の二―六学年の児童約三〇〇名に対し、現在同一住居に生活する家族を好きな順に品等せしめた資料から、父母のうち何れを上位に品等しているかを、同胞数別及び同胞性種別（同性のみ、異性のみ、両性混合）を比較し、その結果を報告した。その際我々は、同胞数別各群において母より父を上位に品等した者の比率は、同胞数四名までは男女児とも同胞数の増加に従って減少し、以後再び同胞数の増加に従って漸次若干回復する傾向のある事を見出したが、今回はこの回復傾向の要因の検討を主目標として考察した二、三の結果について報告する。

まず、前回報告の結果で示唆された同胞両性混合群の分析から始める。同群を更に同性同胞多き者、同性同胞と異性同胞同数の者、同性同胞少き者に三分し、父の上位品等率を比較すると、男児においてそれぞれ五二・八%、五〇%、四〇%、女児においてそれぞれ二三・八%、三五・七%、二五%で相互の間に顕著な差異を認めがたいが、特に同胞数五名以上の者だけについてみると、男児においては同性同胞多き群が 13/20 で他に比して父の上位品等率が高く、女児においては同性同胞、異性同胞同数群が 4/8 で相対的に最も高い。なお、同性同胞多き群と少き群とを比較すると、男女児とも前者の方が絶対的又は相対的に父に傾く者の比率が大きくなる傾向がうかがわれる。これは、前回報告した自己を除く同胞が異性のみの者と同性のみの者とでは前者の方が父に傾く者の比率が大きいという傾向と一見矛盾する。そこで対照的な〃同胞が異性のみの者〃と〃異性同胞が一人のみの者〃の両群について、それぞれ同胞数の多少によって比較すると、前者は同胞数少き場合により父に傾き多き場合母に傾くのに対し、後者は逆の傾向を示す。これらの諸事実は、同胞数の多少とその性別構成が微妙にからみあって父母の上位品等率に影響するらしい事を示唆しているが、当面の問題である同胞数五名以上における父の上位品等率の回復傾向に直接的な関連をもつものとは考えられない。

次に観点をかえて、児童の出生順位に父の上位品等率を算出してみると、男女児とも概して出生順位のあとになる程その比率が低下するが、第四位の処で一度回復する極めて特徴的な傾向を示す。そこでこれを男女合計して更に同胞数別に分析してみると、この傾向は同胞数六人以上において顕著であり、同胞数五人以上の場合三人目と四人目の間で何等かの意味で分化ないし層別化が行われるのではないかと感ぜられる。

最後に、これは同胞数別を座標にして整理しなおしてみると、同胞数五人以上における父の上位品等率の回復傾向は、もっぱら出生順位第一位の者と第四位の者の傾向に依存しているらしい事が見出された。

児童の家族品等について

辻　正三
三木　清子

パースナリティ形成の場としての家庭における人間関係の構造を解明する一つの手掛りとして、我々は本年二月東京都内某小学校の二―六学年児童約三〇〇名に対し現在同一住居に生活する人々を〃好きな順〃に品等せしめてみた。我々は、この資料から両親の揃っている事例のみをとり、他の同居人員は一応考慮の外におき父母のみを問題とし、父母のうち何れを上位に挙げているか―即ち、相対的にいって父母の何れをより好んでいるかを、男女別・学年別・長子、中子、末子別に比較観察しその結果を本年四月の日本心理学会において発表した。今回は、その知見に基き更に二、三年の分析的観察を行った結果について報告する。

まず、男女児童をそれぞれ本人をもふくめた同胞数別に群別し、父より母を上位に選んだ者（以下 M>F 記す）と母より父を上位に選んだ者(以下 F>M と記す)の比率を群毎に算出してみると、男子児とも一人子（F>Mの比率は男児六六・七%、女児六〇%）よりはじめて同胞数の増加に従ってF>Mの比率が減少し、同胞数四人の場合が最も母に傾き（F>Mの比率は男児四四・〇%、女児一二・五%）以後同胞数の増加に従って再びF>Mの比率が若干漸次的に回復する傾向を示した（同胞数七～八人群のF>Mは男児六〇%、女児四〇%）。少くとも女児の同胞数別各群におけるかかる比率の相違は単なる偶然には帰しえないようである。

次に、男女児童をそれぞれ、同胞がすべて同性の者、すべて異性の者、男女混合している者の三群に分ち、各群のM>F：F>Mの比率をとってみると、男児においては同性群五五・六%：四四・四%、混合群五〇・七%：四九・三%、異性群四五・八%：五四・二%、女児においてはそれぞれ七〇・六%：二九・四%、七三・三%：二六・七%、五五・〇%：四五・〇%となり、異性群は同性群に比し男女ともF>Mの比率が相対的にやや大となっている（併しその差は五%の危険率では有意とはいえない）。

以上二つの場合の各群におけるM>F：F>Mの比率の変動を、先の報告で知りえたM>Fの比率が大である末子又は高学年児童の各群における出現頻度の比率と対照してみると、男児の同胞数別比率において両者ともある程度の対応関係を示し、又男児の同胞性種別比率と高学年児童の出現比率との間にもある程度の対応を示したが、男児の同胞性種別比率と末子の出現比率及び女児のすべての場合においては明確な対応関係を認める事が出来なかった。

最後に、同胞数別各群を更に長子中子末子別又は同胞の性種別に群別し、それぞれM>F：F>Mの比率を算

出して比較観察し、同胞数別長子・中子・末子のM＞F：F＞Mの比率は、同胞数の増加とともに各々独自の推移を示すらしいこと、同胞性種別にも同様な傾向が窺われ、殊に男女別全児童のM＞F：F＞Mの比率における同胞数四人以上の推移は、殊ど全く同胞性種混合群における推移に対応するらしいこと、従って混合群を更に分析的に検討すれば同胞数四人以上におけるF＞Mの比率の相対的増大に対する解明が与えられるかもしれない事等の諸点が示唆された。

両手の共応動作の発達的研究

前田　三郎
田中　敏　隆

本研究は本学岸本末彦指導の下に前田三郎、田中敏隆、本学研究室研究生井戸静江、井上秀子、長尾幾等の共同研究である。両手の共応動作の発達的研究は広島文理大久保良英氏が時間的方面より研究されている。本研究に於ては時間及び正確度の面より検討を加えんとしたものである。尚小学校一年をも研究して見た。

両手の共応動作の発達は小学校を通じて見られる。男子に於ては一年―二年乃至三年と五年―六年に於て、女子にありては一年―三年と四年―五年とに於て大なる発達があり中間に一時停滞する傾向が見られる。即ち段階的発達の性格を帯び久保氏の発達傾向とやや異るのである。又学年の進むに従つて個人差が少く発達は均等化する傾向が殊に正確度に於て見られた。之は久保氏の見解と一致すると考えられる。尚知能との関係及び中学生の発達については次回に発表の予定である。

新教育におけるLeadershipに就いて

水野　常吉

御同様われわれの従事している新教育は、その原理なり方法なりの大部分は、応用心理学であるということが出来る。その意図するところは児童生徒のより豊富な生活を受ける機会を均等ならしめ、自由を実行せしめることにより自由を知り、各個性を多種多様に発揮させようと、個人の価値と尊厳の承認を基礎としたものである。

この公教育のもつ社会的使命科、学的調査、民主的理念の普及発展のために、過去のわが国の教育事情から眺めて最も緊要なることは、正しき意味の Leadership を訓練し、万事に採り入れることであると思う。これによつて始めて教育が民主化され、民主的国柄をつくり上げることが出来るのであると思う。

然らば正しき意味のリーダーシップとは如何なるものであるかといえば、首領たること、首領たる器量などの訳語があるが、新教育の上から「指導職位」と訳すべきものであり、権威権力に代つて仕事を促進する力ということが出来るのである。人格者ではない過去の否、現在の多くの所に存在して居る人格的の権力を行使して居るものの外に在る非人格者である。最も公平で私心のない共同協力という「職位」である。この「職位」を通して強い力が生れ出る。一寸考えると空漠なもののように考えられるが心理的に吟味すると力がある。関係する総ての人の総意であるから、人格者以上に力強い、能率のあがる力となって行事を進めることが出来るのである。

新教育の児童生徒の学習能力、興味、態度の成長助成から、カリキュラム構成、教育プログラム組織、成果の評価、測定調査に至るまでその運営は、皆このリーダーシップのもとにまとめられねば真の意義の発揮は出来ないのである。

故に新教育完成には応用心理学者が教育界に飛び込み或は手を延ばして援助し、助言し献言してこそ、その目的を果し得るという大切な場に当面している訳である。又大学に研究所に、安定所にこの職位が運営されるよう周囲からして導いて行かなければならない。

従つて完全な実現には、かすに年月を以てせねばならない。しかしそれなくしては新教育の真価が発揮出来ない。指導職位が共同協力的に運営されるときに、普通の人格者が運営する以上の強き力が出来上るわけである。これには決して一人できめるということがなく二人以上できめるから、誤も少くなる。集団討議が重んぜられるのも、ワークショップの研究も、カリキュラムの構成委員会も皆原理はこの職位の運営の原理に基づかなければならない。ここに応用心理学会に課せられた重大責任があると思う。本会のリーダー各位に工夫貢献せられんことを熱望しておく。

教育指導に於ける心理劇の利用について

福岡　光人

教育の実際における心理劇の有効性を問題として取上げ、小学校児童（一〇才―一一才五〇名）に実施した。役割を自由に選択させ、心理劇に対する児童の一般的傾向を考察し更に問題児（三名）を取上げて、役割交換・場面転換を交互に行った。

結果、心理劇に対する児童の興味関心は高く、劇の実施に当つては平常の心的緊張は殆んど見られない。充分な感情表現の可能な場面を与えるべく教師の計画・配慮が最も必要であり特に要求阻止場面の構成が主要な技術となる。児童の心理的勾配を劇の進行と同時に把握し、児童間の心的傾きを交互に転換させて行くとフラストレーションの解消が早く見られる。情緒的不適応を示す児童には非常に有効な方法であるといえる。特に小学校に於ては教育指導の方法として取上げるべきであり、教師の立入を許さない子供の世界が展開される点有力なケース・スタディの場面になると思われる。心理劇の標準化並びに評価については全く今後の問題である。

133826

検査を反復したときの作業量の変化と各検査の相関

板倉善高
平井新八
井坂正
藤田革哉

まえがき　進学又は就職に当つて行われる適性検査は普及の余り同一検査を何回となく反復する場合が現れてくる。その結果その時の作業量のみで各人の性能を比較評価できなくなったのである。この度の実験は労働省編職業適性検査を反復したとき、作業量が如何様に変化してゆくかを実験し、性能の実効値を吟味査定し、併せて各検査間の相関を見たものである。

検査種目　A乃至紙筆検査（A乃至K）器具検査（M乃至P）

検査日時　第一日、二五年一一月八日午後三時、晴、乾燥（教室内）

第二日、二五年一一月九日午後四時晴、風、乾燥（教室内）

第三日、二五年一一月一七日午後三時晴、風、乾燥（教室内）

第四日、二五年一二月一五日午後〇時半晴、寒（教室内）

第五日、二六年一月二七日午後二時半晴、寒（教室内）

（但し、器具検査は二五年一〇月―一一月午後一―四回、各検査間は約三〇秒休憩）

被験者　東京都文京区新制中学第二学年男女各五名（成績概ね中位）

検査方法　省略〔採点方法〕五回の平均

結果の考察　各検査毎の作業量の増加率

(イ) 運動速度関係（C…三四%、E…二六%、J…二四%）

(ロ) 図形関係（A…二六%、E…二二%、G…三四%、K…六八%）

(ハ) 算数関係（D…二五%、H…三二%）

(ニ) 文字比較（B…三二%）

(ホ) ごい比較（I…三四%）

(ヘ) 器具検査（M…一四%、N…九%、O…一七%、P…二三%）

各検査観点間の錯差相関

	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
A	0.59	0.67	0.69	0.80	0 48	0.10	0.76	0.65	0.38	0.65
B		0.75	0,37	0.55	0.38	0.01	0.67	0.63	0.30	0.44
C			0.23	0.38	0.69	0.17	0.38	0.48	0.65	0.56
D				0.74	0.17	0.04	0.77	0.33	0.07	0.70
E					0.16	0.37	0.80	0.62	0.01	0.62
F						0.60	0.01	0.43	0.96	0.44
G							0.90	0.60	0.12	0.14
H								0.67	0	0.51
I									0.27	0.51
J										0.39

むすび　この検査は費用の関係で被験者僅か一〇名に過ぎない。従ってその信頼度も低いかも知れない。然し各種条件は極めて厳正にし五回の平均をとつたので、結果の示す傾向は吾々の予期した所に合致する点が多い。

又各検査の得点は五回の平均なので個人の表出性能の平均値とゆうことができ、得られた相関はこの種被験者群に関する限り正確のものと言えよう。

（二六・七・一四）

カタログ・テストの研究
――その一及びその二――

高橋和年

カタログ・テストは数百冊の書籍のカタログの中からもっとも読んでみたい（若しくは欲しい）と思うもの一〇種を被験者にあげさせ、選ばれた書名から、その個人の関心の向う所を知ろうとするテストである。カタログは「恋愛」から「技術」に至る二二乃至二四の人生に於ける主なる関心領域に配分されているため、選ばれた一〇種の書名から、当該個人の諸関心の相互関係と構造、及びそれらの分散或いは集中の様態を明らかにすることが可能である。又このテストは二〇分前後の短時間に、而も集団的に行い得る利便がある。我々はこのテストの研究のための予備的な調査として、今春及び今夏、宮城県栗多郡に於ける某私設会社志願者一七〇名及び仙台市の某施設の非行少女二五名について実施し。人間の関心に関する多くの著しい心理学的事実を確めることができた。

情緒成熟検査（第二報告）

木村禎司

この検査は Fredrick : What is your emotional age ? と呼ばれるもので、真の "Emotional Maturity scale" と呼ばれるのは R. R. Willoughby のものが勝れているといわれる。二五の質問からなり、「はい」「いいえ」に印しをつけるのであるが、採点が少し複雑なので、これは例えば一問の「はい」には一一点、「いいえ」には「二一点」を与えるというように各問によってそれぞれ異るばかりか、その点を加えて二五で割る等の手数があり、その段階の区分にも不明瞭な所があるので、その点を少し詳細に研究して見たいと思ったのである。

被験者は新制大学の昼間部（医学コース）一二一名、

夜間部（法文）八七名で、そのうちには女子も一七名混っている。昼間部は年令が比較的に揃っていて一九・五五、夜間部は二二・七六で年令は不揃で一八才から最高四八才まである。その平均を見ると年令と情緒成熟とは何の関係もない事が分る。これは前の検査でも同様であったが、一八才以上は身体的にも精神的にも一応成熟者と見られるから、情緒年令の成熟は多少おくれるとしてもせいぜは二二、三才まで、その成熟度に個人的に差の甚しいことが分る。年令的に比較的人数の多い昼間部の一八才と一九才を取って比較すると、平均において僅の差があるが、この平均の差がはたして信頼し得るものかどうか。その信頼度を見るため、差異のBを出してそれでD（差異）を割ったのであるが、その値は一・四一で十分に信頼する差とはいえない。（三以上なれば完全に信頼し得る）なお二〇才は人数も少いが平均がかえって小となっている。

性別には少数ながら女子の平均を出して見たが、その平均は最も高く、成熟良効といわなければならない。この差は多少の信頼出来るかと思われるが、数が少いので、次の研究の課題とする。なお血液型の問題はすでに解決済のものといえようが、試みに血液型について報告させて、その平均を出して見た。そのうちで成熟良好はB型で、他は平均成熟で第二がO型、第三AB型、第四A型の順になっている。この場合も差異の標準錯差で平均の差異を割ってみたが、いずれも信頼し得る値とはいいにくい。

次に個々の質問について「はい」「いいえ」の分配状況を調べたが、大体両者が平均して異同数になるものが(1)(3)(4)(5)(6)(12)(13)(19)(20)等で、「はい」の特に多い八〇％以上のは(7)と(23)とであり、「いいえ」の特に多いのは(10)(11)(18)(25)で、やや多いのが（七〇％以上）(2)(16)(22)である。なお女子だけの傾向をしらべた所が「はい」の多いのは(7)(9)で男子と異る所は(9)が加わたことであり、「いいえ」の多いのは(2)(10)(11)(16)(17)(18)(22)(24)(25)等多数あることであり、そのうち(10)と(17)が絶対に多い。女子と男子とで異るのは女子で(12)が否定されていることと、女子には(23)を肯定するものが男子程多くないことである。

色研作成色感テストの吟味

木村俊夫

色研作成色感テストとは、日本色彩研究所が作成した『色感テスト配色集』のことである。これは米国でいわゆる Color "Eye-Q" test の日本化であって、米国のものより一段と優れているということである。然るに、このテストの評価基準は年令的発達を無視して設定されて居り、また指定せる色彩感情を惹起せしめるに不適当の配色もある様に見受けられる。これらの欠点を指摘し、疑点を解明し、そしてこの種のテストの価値を検討せんとするのが、本研究の目的である。

右の目的追求のため、約二四〇〇名の小・中・高等学校及び大学の生徒学生に就いてテストを試みた結果を整理したところ、次の様な事実が判明した。

(1) 幾つかの不適当な配色が存在する。
(2) 評価基準は年令発達的に設定すべきである。
(3) 性差が多少見られる。
(4) 地域差が相当見られる。
(5) 知能との相関は +0.40 乃至 +0.61 位ある。
(6) 信頼度は自己相関の場合 +0.62 程度である。
(7) 色神異常者でも充分色感の発達を見出し得る。

以上の通りであるから、色感そのものの本質構造の究明と相俟って、色彩教育上の評価の手段としてのみならず、パースナリティーの検査の手段としても充分に使用価値のあることが想見せられるが、そのためには『色研作成色感テスト配色集』は、本研究の如き手続きを以て改良を加えられ完璧のものとして広く学界及び教育界にまみえねばならぬ。

常識検査の試み

橋覚勝

「常識テスト」は既に淡路、岡部両氏によって作成実施せられたことがあるが（この結果については詳かにしない）、それを改訂して今回試案的に作成実施した。これは何れかといえば社会生活経験によって習得せられる一般的な知識的成熟度を検査することを主眼とする。各個人の生活場面によってその経験を異にすれば、むしろ主観的な生活場面に於ける興味方向を検査するものという方が、より適切かも知れぬ。同時にこれによって、各個人のパースナリティーの社会生活に於ける適応性を検査することも可能と考えられる。従って実際的には、本検査の結果によって、個人的には進学指導、職業指導など、一般に生活指導の一助とすることもできようかと考えるのである。

一応シュプランゲルの六種の生活形式を、それぞれの生活場面として、それらの場面に於ける経験、場面に関する知識について、問題を作成し、（六種の場面につきそれぞれ一〇問題、合計六〇問題）面々の問題に対する正解数によって、常識的成熟度、常識乃至は興味の方向更にパースナリティーの生活適応の様相を検出しようとする。

なお本テストはある範囲内に於て新しく作成せられたものであるから（さらに前述淡路、岡部両氏の結果を知ることができなかったから）その妥当性なり信頼性なりが、どの程度にあるかを、一先ず検定せねばならぬ。その意味に於て本実施はテスト・テスティングの域を出ないことを予めことわっておく。

追而本実施は豊中市教育研究所の厚意とその協力によ

性別並に都鄙別基礎学力差

橋本重治

一、調査の方法

国語の読み・書き・文章理解・算数の計算・知識（名数・図形・算数に用いられる符号等）問題解決につき、小学校二、三年程度から六年までのカリキュラムについての問題を作り、之を四、五、六、七年生に共通にテストした。

そのテスト問題の信頼度は Chance-half Correlation を修正した値で、国語算数夫々右の三種のテストを四、五、六年に課して見て、国語では五年の書字・八六を最低に、最高は四年読字の・九九に亘り、算数は問題解決で四年の・七六を最低に、六年計算の・九六に亘り、およそ満足すべきものであった。

被検者は、各学年男女、都鄙適当にサンプリングし、その数は上表に示す通りである。国語は昭和廿四年九月算数は昭和廿五年九月実施しその被検数は両者同一である。

二、調査の結果

（A）男女差については国語、算数夫々上表1、2の通りである。

国語に於ては一義的に有意味な男女差が見られ、女子が優れている。然し算数に於ては三種の学力を綜合的に見れば何れが優れているとも言えない。

（B）都鄙差については、次表3、4の通りである。

これ又、国語については極めて明瞭な地域差が見られ、都

つたものであることも附言しておく。

如上の考想によって、被検者として選ばれたものは豊中市新制中学三年生生徒男子六一八名、女子五五二名である（新制中学四校の内三年生のあるのは、当時一中、二中、三中の三校であった）。実施日時は昭和二六年三月上旬。時間の制限は設けないが、約一時間で完了。

結果については、本年九月頃刊行の豊中市教育研究所紀要に掲載の予定である。

Tab. 1　国語での男女差

	学年	Nx, Ny	$\bar{x}$, $\bar{y}$	Sx, Sy	$\bar{x}-\bar{y}$	$\bar{x}-\bar{y}\Big/\sqrt{\frac{Sx^2}{Nx}+\frac{Sy^2}{Ny}}$
読字	4	男 635 女 643	12.7 13.9	7,0 6,1	−1.2	3.3 ※※
	5	男 620 女 642	19.6 21.9	9.4 8.1	−2.3	4.6 ※※
	6	男 658 女 632	27.9 28.9	10.1 8.5	−1.0	1.9
	7	男 334 女 311	30.4 33.6	9.7 7.5	−3.2	4.7 ※※
書字	4	男 635 女 643	11.5 13.9	7.0 6.8	−2.4	6.3 ※※
	5	男 621 女 636	16.4 22.1	11.2 11.3	−5.7	8.9 ※※
	6	男 660 女 626	25.3 30.1	13.8 13.2	−4.8	6.4 ※※
	7	男 331 女 362	29.3 35.5	15.4 14.2	−6.2	5.3 ※※
文章理解	4	男 632 女 643	14.2 15.1	8.5 8.4	−0.9	1.9
	5	男 624 女 641	18.1 20.3	9.0 8.5	−2.2	4.5 ※※
	6	男 656 女 635	22.6 23.6	8.9 8.0	−1.0	2.1 ※
	7	男 356 女 331	23.9 26.5	8.0 7.2	−2.6	5.1 ※※

Tab. 2　算数での男女差

	学年	Nx, Ny	$\bar{x}$, $\bar{y}$	Sx, Sy	$\bar{x}-\bar{y}$	$\bar{x}-\bar{y}\Big/\sqrt{\frac{Sx^2}{Nx}+\frac{Sy^2}{Ny}}$
計算	4	男 703 女 620	11.8 12.2	5.8 5.5	−0.4	1.3
	5	男 632 女 621	21.1 22.6	8.2 7.3	−1.5	3.4 ※※
	6	男 616 女 618	30.7 32.3	10.9 10.5	−1.6	2.6 ※※
	7	男 334 女 338	31.9 32.9	12.5 11.5	−1.0	1.1
知識	4	男 695 女 621	7.2 7.3	4.7 4.1	0.9	3.7 ※※
	5	男 629 女 620	12.5 11.5	5.8 5.4	1.0	3.1 ※※
	6	男 616 女 615	14.8 13.5	7.0 6.8	1.3	3.3 ※※
	7	男 333 女 340	18.7 17.0	7.6 7.2	1.7	3.0 ※※
問題解決	4	男 698 女 620	6.1 6.0	2.6 2.8	0.1	0.7
	5	男 631 女 624	8.4 8.6	3.8 3.6	−0.2	1.0
	6	男 617 女 616	11.1 11.3	4.7 4.5	−0.2	0.8
	7	男 333 女 340	12.9 12.6	5.1 4.7	0.3	0.8

Tab. 3　　国語での都鄙差

	学年	Nx, Ny	$\bar{x}$, $\bar{y}$	Sx, Sy	$\bar{x}-\bar{y}$	$\bar{x}-\bar{y}\Big/\sqrt{\frac{Sx^2}{Nx}+\frac{Sy^2}{Ny}}$
読字	4	ト 567 ヒ 711	14.5 12.4	7.0 6.1	2.1	5.7 ※※
	5	ト 526 ヒ 736	22.7 19.4	8.9 8.5	3.3	6.6 ※※
	6	ト 550 ヒ 740	30.2 27.0	8.9 9.5	3.2	6.2 ※※
	7	ト 175 ヒ 470	33.4 31.4	7.9 9.2	2.0	2.7 ※※
書字	4	ト 568 ヒ 710	13.7 11.9	7.4 6.6	1.8	4.5 ※※
	5	ト 524 ヒ 733	21.7 17.6	12.2 10.7	4.1	6.2 ※※
	6	ト 551 ヒ 735	29.7 26.1	13.8 13.4	3.6	4.7 ※※
	7	ト 177 ヒ 456	35.1 31.2	15.1 14.8	3.9	2.9 ※※
文章理解	4	ト 567 ヒ 708	15.7 13.9	8.7 8.5	1.8	3.7 ※※
	5	ト 526 ヒ 739	20.6 18.2	8.1 8.6	2.4	5.1 ※※
	6	ト 550 ヒ 741	24.4 22.1	7.9 8.6	2.3	5.0 ※※
	7	ト 176 ヒ 511	26.9 24.5	7.9 7.8	2.4	6.5 ※※

Tab. 4　　算数での都鄙差

	学年	Nx, Ny	$\bar{x}$, $\bar{y}$	Sx, Sy	$\bar{x}-\bar{y}$	$\bar{x}-\bar{y}\Big/\sqrt{\frac{Sx^2}{Nx}+\frac{Sy^2}{Ny}}$
計算	4	ト 501 ヒ 822	12.2 11.8	5.7 5.6	0.4	1.3
	5	ト 474 ヒ 779	23.2 21.0	7.8 7.8	2.2	4.9 ※※
	6	ト 469 ヒ 765	32.3 21.0	11.0 10.7	1.3	2.0 ※
	7	ト 184 ヒ 488	35.8 31.0	11.8 11.5	4.7	4.7 ※※
知識	4	ト 501 ヒ 815	7.0 6.7	4.5 4.4	0.3	2.1
	5	ト 472 ヒ 777	12.5 11.8	5.8 5.6	0.7	2.1 ※
	6	ト 471 ヒ 760	15.6 13.8	7.2 5.7	2.3	5.9 ※※
	7	ト 184 ヒ 489	19.5 17.2	7.1 7.4	2.3	3.7 ※※
問題解決	4	ト 501 ヒ 817	6.3 5.9	2.8 2.9	0.4	2.5 ※
	5	ト 474 ヒ 781	9.0 8.2	3.6 3.6	0.8	3.8 ※※
	6	ト 469 ヒ 764	11.6 11.0	4.8 4.5	0.6	2.1 ※
	7	ト 184 ヒ 487	13.9 12.3	4.7 4.9	1.6	3.9 ※※

市が優れている。

算数についても、一般に都市が、優れているが、ただ国語ほど顕著な開きが無いようである。このことは教育社会学的になんらかの意味を持つものかも知れない。

I、QとG、Qの相関に関する研究

大平勝馬

一、目的

身体的成熟の早い者は知的発達に優位性を持つと言われている。若しその優位性の程度が一般的に高いものとすれば従来暦年令との関係においてのみ知能程度を表現している知能検査結果に対し可成りの修正を要すものと考える。この見地から身体的成熟度と知能発達間の相関の有無程度を確かめたいのが本研究の目的である。

二、方法

身体的成熟度決定の基準としては最大身長増加期、初潮期、化骨化の程度等種々ある。著者は手根骨X線像によって化骨化の平面的計測を行い、他方知能検査、其他精神発達の綜合的検査を行って統計的に処理することにした。X線像はカリーパスを用いて各化骨核の縦横径及びその積により面積代用値を決定し、更に身長、暦年令の条件を同一にした標準を定めるためにガウス最小自乗法に基き著者自身の公式を作成した。その公式は次の通りである。

男児用(自6才至12才) $Z=23.44x+(-14.13)y+8.55$

女児用(自6才至11才) $Z=21.50x+(-11.34)y+12.39$

公式中Zは化骨化面積代用値（mm^2単位）、xは暦年（月）、yは身長（cm）を示す。本式に個人計測値及び

暦年を必要に応じ代入することによって個人別標準化骨核面積代用値及び骨格年令を算出し得る。更に骨格年令と暦年令とより成長指数を算定し得ると考える。従って本研究における骨格年令 Carpal Age 及び成長指数 Growth Quotient は上記公式によって算定した。被験者は小学一年から六年に至る一六〇名である。

三、結　果

結果中骨格年令 Ca. A 精神年令 M. A 暦年令 Ch. A 間の相関は Table 1 の通り。Ca. A M. A 間には可成りの相関が見られるが部分相関は無視すべき結果であすれば、G.Q 1.Q 間には ＋.39 程度の相関を認め得ると結論しておきたいと思う。

Table 1.

	M. A (x_2)	Ch. A (x_3)
Ca. A(x_1)	M. 516±.069 F. 532±.068	M. 868±.024 F. 879±.022
Ch. A(x_3)	M. 492±.071 F. 508±.072	

部分相関　$\gamma_{12\cdot3}$　M＝.206±.073
F＝.208±.073

る。この点は G.Q と I.Q 間の相関男 .211±.071 女 .162±.073 となっていることによって裏づけられているものと考える。然し I.Q 段階別 G.Q 平均を見ると Table 2 の如く一部を除き有意の差をもって相関連し合っている。そこで I.Q G.Q 間の分散図表を描いて見ると回帰線は稍々曲線的なることが分った。従って G.Q(x), I.Q(y)間の相関比を求めて見ると

$\eta_{x\cdot y}$＝＋.418±.044　　$\eta_{y\cdot x}$＝＋.369±.046

になった。これを公式

$$\eta=\sqrt{\frac{1}{2}\left(\eta_x^2+\eta_y^2\right)}$$

によって単一数値にすれば、.394 となり Blakman の直線の基準公式により有意性検定をすれば其値 3.275 となり γ との差は有意と認められる。この結果から

Table 2.

要項＼I.Q段階＼性		優秀	普上	普通	普下	低劣
人数	M	19	4	11	9	7
	F	16	5	11	10	8
	Σ	35	9	12	19	15
I.Q 平均	M	148	114	100	77	63
	F	145	123	101	79	33
	Σ	147	119	100	78	63
G.Q 平均	M	101.6	106.7	109.0	98.9	81.7
	F	96.8	108.5	101.6	96.6	94.4
	Σ	99.4	107.7	105.3	97.7	89.4

映画観客調査

乾　孝
鈴木幹人

一、目的　本調査は中学生（二年生）が映画教室として、学校動員により観覧した映画の内容をどのように理解したかをみるために行った。

二、調査の方法　本調は一九五〇年一一月に東京・渋谷の松涛中学校二年生が「ジャンヌ・ダーク」を観覧した際、観覧後感想文の提出を求め（男子五五名・女子四〇名・計九五名）これを次の要領で整理した。〈映画は天然色・感想文は任意〉

―整　理―

感想文の中で取り上げられている映画の内容を（A）全体的な感想として述べているもの、（B）主人公ジャンヌ・ダークについて述べている箇所、（C）信仰（神）について述べている部分、（D）戦争について述べている部分、（E）身分の高いものについて述べている部分、（F）兵士・町人についている部分に分かち、それぞれを男女別に頻数を出し、彼等の印象に残り、強調している箇所を摘出した。

三、結果　（A）頻数男三七、女三一で、内主演についての賞讃、男一五（四〇%）女一三(四三%)以下略、（B）頻数男五七、女七一で、こゝでも主演への賞讃、男一六（二八%）女一三（一八%）この項の最高は「信仰があつい神の子、神を信じ自分を捨てて神のために死んでいった」一八(三二%)二三（三二%）以下略、（C）頻数男三九、女三六で、内讃美的なもの一一（二八%）一九（五三%）客観的なもの一〇（二六%）一三（三六%）批判的なもの一八（四六%）四（一一%%）、（D）頻数男四九、女三四、男子で感激的に経過を述べているもの、一七（三五%）と戦法の幼稚さを指摘するもの一八（三七%）批判的一四(二八%)、女子は一二(三五%)四（一二%）一八(五三%)、（E）頻数五七・二七、男女共「宗教裁判の不正」をつもくの一三(二三%) 七(二六%）以下略、（F）頻数男一二女八以下略。

四、結果の検討　①ABの結果、主演者構成に注意が極度に集中された。②Cは男子は批判的なもの多く、女子は讃美的なもの多し、③Dに於いて特に注意を要するのは批判的なもののうち戦法に関するもの三七%、一二%。これは当時の戦争を現在の戦争に比較し、近代戦の優越性を誇示し、好意的なものへの移行の可能性を含む。④Eは男子に多く女子に少ない。これは女子がより主人公に対して感情的に観賞し、他のものへの視野がせばめられた結果とみてよい。

五、結論　この種映画は主演者、劇構成によって文部省審査委員会が意図するような「史潮の流れをつかむ」ことは困難である。

職務分析について

佐柳　武
野口　俊幸
西江　美緒

一、職務分析の目的

労働省においては、職業紹介、職業指導、職業相談、その他人事管理上の諸問題を解決させる技術的演習並びに基本的資料を取得するため職務分析を実施する。

二、職務分析の定義

職務分析とは、観察と質問法によって、職務に含まれている全ての仕事、職務に課せられた責任、さらに職務の熟練さ、困難さ、身体的動作、作業環境等を明かにする技術的方法である。

三、職務分析の三原則と四方式

凡そ産業経済社会に存在する各種の職業形態は決して唯一絶対のものではない。

従って、何等かの方法によりそれ等の職業的内容、要件を明かにするためには分析調査に先立って、その対象を正しく把えることから出発し、而して一定の約束の下に、一定の観点から分析を正しく進める厳格な基準を定めなくてはならない。

ここにおいて、実際的にして有効な単位としての「職務」の概念を導入し且つ、職務分析の三原則並びに四方式を定め、これを根拠として所定の要因につき、分析を展開させるものである。

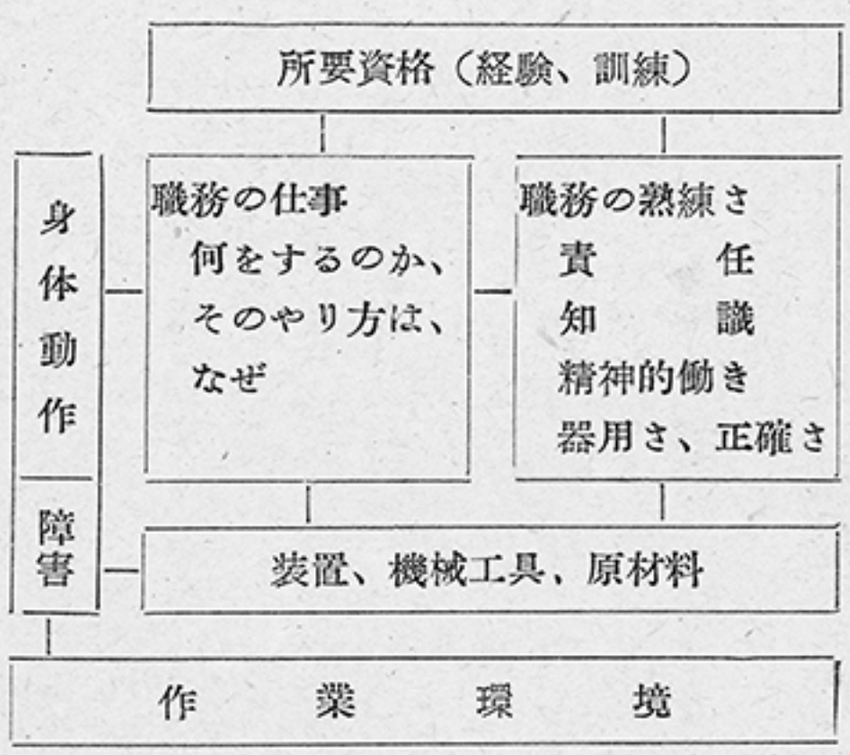
一般的に職務（Job）とは、仕事（Task）の集合体として考えられるが、われわれは Task と Job との中間に Position（地位）を想定し、これを媒介として職務を定義づける。

三原則と四方式との関係は次の如く図式化できよう。

職務概念の把握

P1 完全正確な職務の決定
P2 職務の仕事を完全正確に記述する
P3 職務の一人前の従業者たるに必要な要件の指摘
P……Principle
F……Formula
F1 作業者は何をするのか
F2 そのやり方はどうするのか
F3 なぜそれをするのか
F4 職務の熟練性（困難さ）
a 責任
b 知識
c 精神的働き
d 器用さ、正確さ

四、分析要因の関係



五、実施状況

昭和二三年一月から二六年三月までの期間に、二〇〇産業、四〇〇事業所、六〇〇〇職務を分析し、その中、一一〇産業については職務解説書として印刷公表した。解説総頁は二二、二〇〇頁、解説職務数は、二五〇〇である。労働省の対象とする八九四産業の分析が完成するには今後数年を要する見込である。

職業辞典編纂の方針（梗概）

大谷　秀正
小林　司郎
池田　浩

職業辞典編纂の目的

職業辞典編纂の目的は公共職業安定所を訪れる求職者が、適当な職業を選択し得るよう、職員が助言援助し且つ就職せしめ得るに足る職業情報を提供することである。また、広く官民を問わず諸団体に提供して職務評価、適正配置の基礎資料たらしめることを目的とする。

かかる職業情報は職務分析の進捗によってはじめて作成可能となったのである。

米国の職業辞典

一九三九年初版、一九四九年再版が刊行され、その内容は三分冊となっている。第一分冊は職務の定義、第二分冊は五部に分れ、第一部が職業分類、第二部が販売商品の分類、第三部は技術用語の解説、第四部は産業の解説、第五部は産業名索引、第三分冊は入門職業分類となっている。

我国職業辞典編纂の方針

我国においては米国の職業辞典に範をとっているが、第二分冊、第二部及び第三分冊は次の機会を待つ予定である。職業辞典における最低単位は米国の Job の概念を採用し、これに職務という名称を与えてその定義を明らかにする。職業分類は米国のそれを用い、国情の相違に基く難点は、主として細分類で調整する。

内容の説明

職務の定義　五〇音順で排列し、よみ方、所属産業名、職業分類番号、別名、定義等を明らかにする。

職業分類　通常、大、中、小、細という分類に分たれ、これらは変則的一〇進法によって五―六桁の索引番号がつけられる。

職業分類の基準　分類の基準は職務の類似性であり、その中最も主要な要因は任務である。これが基準として用いられない時は、所属産業、作業環境、危険性によって判断される。

職業分類に際しての問題　分類は個々の職務内容を明確に把握していなければ基準を失うこと、又諸要因の強度の矛盾によっては、例外的分類法をとること、日米両国の国情の相違等が主要な問題となる。

結　語

現段階において、一挙に完璧は望み難く、今後の継続的な職業の研究によらねばならない部分が多い。

労働省編職業適性検査の構成について

行田　忠雄

一、序

労働省編職業適性検査は、一九四七年アメリカ合衆国職業分析及び産業奉仕部において作成した General Aptitude Test Battery を G.H.Q の好意により提供されたものを労働省職業安定局において飜案したものである。

二、検査の構成と測定せられる職業適性

この検査は、一五種の検査の組合せから構成されているが、そのうち一一種は、紙筆検査、四種は器具検査である。即ちA部工具照合、B部名詞比較、C部縦線記入、D部計算、E部平面図判断、F部打点速度、G部立体図判断、H部算術的推理、I部語意、J部記号記入、K部形態照合、M部挿込み、N部挿し換え、O部組合せ及びP部の分解である。

これらの検査の得点は、職業適性に対して負荷された重さの表によって換算せられ十種の職業適性として示される。即ちG知能、V言語能力、N算数能力、S空間判断力、P形能知覚、Q書記的知覚、A狙準又は眼と手の共応度、T運動速度、F指の器用、M手の器用がそれである。又この検査は一般人口の得点平均一〇〇、標準偏差値は約二〇として示されている。

三、職業適性の型

職業適性の型は、約二、〇〇〇の職業を代表する二〇の作業領域に対して発展せしめられている。これらは、職務分析の結果に基いてなされたもので、同一の職業領域においては同一の職業能力を必要とする考えに基くものである。従って職業適性の型は、これらの職業領域に要求されている最も顕著の能力の最小限の得点からできあがっている。例えば第一型GV—知能、言語能力—の最低得点は共に一二〇で、この型の領域には、文学、著述、飜訳、編輯等、第四型GNSFは知能、算数、空間判断の最低得点一〇〇及び指の器用八〇で、凡ての機械関係及びその修理作業に予言的価値を認めるが如くである。

四、職業適性の判定手続

個人検査成績は、職業適性のプローフィルとして示され、その得点から二〇の職業領域が、それぞれ要求している能力の型の最低得点以上であるかどうかを判定する。型のどの一つでも最低得点に達しない場合は、その職業領域における職業適性は認められない。

五、結　語

労働省編職業適性検査は、職業経験を有していない年少者の職業相談目的に対し、極めて貴重な情報を提供する。その他、進学、又は従業員の選考配置等にも利用出来る。しかしこの検査は音楽、美術等の適性及び眼と手と足の協応度は測定することは出来ない。この検査は、アメリカにおいて作成せられたもので、わが国においては中学三年の検査成績があるのみである。従ってわが国においては職業事情も異っているかと思われるので、職務分析の進捗と共に一般作業者に実施して予言的価値の高い職業適性検査に発展させて行く必要を痛感している。なお原形においては、標準は一つであるが、年令段階に応ずる標準も必要なのでは無いかとの疑問を持って、目下研究を進めている。

労働省編職業適性検査の標準化について

田中武平
大場隆道

一、目　的

アメリカ版職業適性検査を短縮し、我国の職業適性を判定出来るようにするために標準化を行った。

二、方　法

被験者は就職機会の多い中学校三年生を約四五〇〇、都市と農村で男女約半数ずつとり、又現場従業者中造船工場と繊維工場についている者約四一〇〇名を選び昭和二五年九月より現在まで実験を行い、検査問題の信頼性と適職判定のための諸資料を作成した。

三、結　果

(1)、各問題別の男女の差、都市農村の差は殆んどあらわれない。

(2)、各問題間の相関係数は、性能を同じくする問題では〇・五以上性能を異にする問題間では〇・三以下である。

(3)、各問題の信頼係数は、ルーソンメソッドによれば何れも〇・八五以上である。

(4)、各問題と知能検査（田中B式）との相関係数は、知能算術能力を構成する問題、書記的能力の問題などについては〇・五以上、運動速度、共応などについては〇・三以下である。

性能との関係でも同様である。

(5)、定められた換算点による平均点は九三—一〇九、S・Dは一三—二〇である。

(6)、各性能間の相関はG・V、G・Nは〇・七四で最高

でその他は大体〇・四以下である。

(7)、紡績工場に於ける成績はA、T、F、Mの四性能が高く、定められた所要性能と検査結果は一致する。

(8)、以上の諸結果により現行の換算点を定め、適職判定に用いられることが妥当である。

四、問　題

(1)、適職の予見性は現在検討中であって、年令発達による差もあると考えられる。

(2)、妥当性（こゝでは勤務成績と検査結果の一致をいう）の問題は研究中である。

知能と職業適性について

田　崎　仁

(1) **研究の目的**　日本職業指導協会編「一般職業適性検査」は、九種の検査によって、一〇の能力を検査するようになっている。その中、知能は特殊の知能検査を行わず、形態、語い、算術の三検査の綜合点（知能点）によって表わすようになっている。この三種の検査は、一般知能との相関が、とくに高いから、この三検査によって、一般知能が測定できるとの理由によるのであるが、第一にこの三検査だけで、知能の測定がどの程度にできるか（知能検査としての妥当性）、第二に、この知能検査と他の下位検査との相関はどうか、を調べることを目的とする。

(2) **方法**　職業適性検査と、田中B式知能検査を同一被験者に実施し、各種の相関々係を調べる。

(3) **被験者**　山梨県某中学校二—三年生、男女計一一七名。

(4) **実施の時期**　田中B式、昭和二五年二月（二年生の時）適性検査、昭和二五年一一月（三年生の時）

(5) **結果**　検査結果から得られた、各種の相関係数は第一表の通りである。

第一表　知能と適性知能との相関

	知能					
適性	偏差値	知能点	抹消	異同弁別	制約連合	置換
知能点						
名称比較	0・六五	0・六八	一	0・三三	0・六八	0・一六
速度	0・三一		0・〇四	0・三六		
算術						

ア、適性検査の知能点と田中B式との相関はかなり高い。独立した知能検査相互の相関程度である。

イ、両検査で同種の検査の相関はかなり高い。

第二表　各下位検査間の相関係数

	名称比較	狙準	型盤	棒さし	球拾い	速度	算術	語い	形態
名称比較		0.316	0.230	0.232	0.065	−0.006	0.681	0.573	0.350
狙準			0.185	0.346	0.086	0.118	0.374	0.271	0.301
型盤				0.182	0.146	0.205	0.316	0.187	0.269
棒さし					0.196	0.099	0.430	0.352	0.126
球拾い						0.235	0.160	0.011	0.128
速度							0.020	0.032	0.057
算術								0.636	0.425
語い									0.440
形態									

性度と書記的職業との関係について

渡辺　徹
村中　兼松
加藤　仁

ターマンらはMIFテストによって、多くの職業人の性度を測定しているが、これによると、男子では機械技師、建築技師などがもっとも男性的であり、法律家、販売係、銀行家、行政官がこれにつぎ、教師、医師、機械製作者、記書、商人などが中位を占め、新聞記者、芸術家、牧師などがいちじるしく女性的であることが示されている。

女子においても、もっとも男性的なのは一流運動選手である。これについで男性的なのは哲学博士、医学博士などの知的グループである。保姆も比較的男性的な得点を示している。教師、専門的職業、書記、秘書、事務員などはその中間に位している。そして主婦、芸術的職業、理髪師、婦人服裁縫師などと次第に女性的となり、家庭使用人はもっとも女性的であることが示されている。

われわれは渡辺、村中共編「性度検査」によって次のような職業人の性度を測定してみた。その得た心の状況は、男子では高等学校生徒がもっとも男性度が高く、運転工、自動車修理工、現図工、機械工などがこれにつぎ、撓鉄工、熔接工、鋳物工などは低い男性点をあらわし、百貨店員はもっとも女性的な結果を示している。

女子ではまず、補導生についてみるに、タイピスト補導生がもっとも女性的で、事務補導生がこれにつぎ、製図補導生、仕上補導生と次第に男性的になっている。他のグループでは機械工がもっとも女性度が高く、つぎが百貨店員、タイピスト看護婦の順に、次第に男性的となっている。

われわれは今回、渡辺、村中共編「簡易性度検査」に

よって、主として書記的職業をとりあげてその性度を検討してみることにした。検査の結果についてみると、男子は速記（養成所生徒）が最も男性度が高く、事務員、英文タイピスト、謄写筆耕（補導生）、経理事務（補導生）、印刷工の順に男性度が低くなっている。総体に男性度が低く得点は ＋40—＋20 の範囲に集っている。

女子では謄写筆耕（補導生）が最も女性度が高く、店員、事務員、経理事務（補導生）、和文タイピスト（補導生）、英文タイピスト（補導生）の順になり —60—80 の範囲内に集って総体に高い女性度を示している。英文タイピストは —49 で比較的女性度が低くなり、速記（養成所）は—21で著しく低い女性度、つまり男性的な傾向を示している。

今回は一部の書記的職業についてその性度をしらべてみたのであるが、さらに今後は他の職業について広く検討してみることにしたい。

現代における流行の一研究(要約)

伊藤安二
江川允通
岸美江
俊彦

これは流行伝播の経路と過程の研究の一部である。研究の対象は服装に限った。服装に於ては〃何を流行というか？〃は文化的に規定されているからである、文化的に規定された流行とは、"Ground" としての慣習変化に対するその進みとして際立った "Figure" としての文化変化であるる。又、文化的強制としての流行と、個人の Primary な Commnication の手段として、更に個人の積極的自我表現としての流行の受容との間には強力な緊張体系が生じる可能性があり流行伝播の心理学的過程の研究に有効な対象であるからである。

流行伝播の過定：流行を成立させる所の〃始め手〃—〃伝え手〃—〃受け手〃の単位的過程の異位相的多層的合成は〃流行の場〃を形成し、この場合の力は中心より周辺に〃流行の勾配〃を形づくる。個人の流行に従う行動はその属する層によって規定される流行の勾配上の位置に随ってこの場の力によって決定される。その際の心理的過程は一般の知覚、欲求、学習、態度形成等の法則によって説明されるものであって特別な流行の心理、摸倣、虚栄等によって説明されるべきではない。今回の調査は勾配の高さと流行に対する態度との函数関係を求める試みである。

調査対象：大きな洋裁学校、小さな洋裁学校、女子のみの大学（の心理の授業に出席した学生）、早大（の心理の授業に出席した）女子学生、この順序は所謂〃専門家的判定〃による勾配上の列位である。抽出は Purposive selection

調査方法：質問紙法により早大のみ Intervieu 併用 Questisnaoire Ⅰ、(1)流行という現象に対してどう思うか。(2)流行の尖端を行く人に対してどう思うか。(3)新聞雑誌等の流行の記事を見てどう思うか。(4)自分の服装と流行との関係。Ⅱ、(1)レースをはめこんだブラウス、(2)以下略。等現在流行の細目について、以上自由問答（Ⅱ）のみ〃持っている〃〃持っていない〃〃欲しい〃〃欲しくない〃の選択回答を求めた。以下略。

分析：以上現象論的函数関係は Social status, Cultural pattern によって Situatisnal に理解されなければならない。特に被調査者の年齢が殆ど同一であることに鑑みてこの必要は大である。(1)大きな洋裁学校：Adult womanhood に Orientate されている。子供っぽい流行に対しては逆に否定的、流行は生活の美化として肯定、流行生活への参与を可能ならしめる Economic situatisn (2)一般大学：衣生活は生活空間の相当大きな領域を占めている Adult womanhood への Orientation は開かれている（階級的に）College life は一つの Imitation とが（階級的に）College life は一つの Imitation としてこれを抑止、この Repression の結果は Ambivalant attitude と Infantilion である。以下略。

社会的緊張のダイナミックス

江川允通
岸俊彦

この研究は当初少数集団の研究として発足したが途中から社会的緊張の研究に含まれるようになったので題目を、(1)社会的緊張のダイナミックス、(2)社会的緊張とパースナリティ、(3)プロジェクティヴ・メソッドによる集団の検査と改めた。(が、変更の連絡の手順が狂ったのでこれ等は本題目の中の夫々一節として、(1)及び(2)は要約のみを江川が報告する)

近来社会的緊張の研究が盛になる趨性にあるが、私達は社会的緊張という概念を Frastration-Aggression の文脈を離れ、次のように理解して研究を進めたい：ある社会集団の成員の大部分と他の社会集団との間の両極的緊張体系及びこれに基く集団成員の緊張を社会的緊張とする。緊張そのものは一般的緊張と変らないし又変りがあってはならない。我々が対象とした某民族的少数集団を例として以下考察を進めると、偏見と弾圧という負の誘意性の強い出来事が周囲の民族との間に緊張体系を生じさせ、この少数集団が分節する。大数集団の地の中で少数集団は図柄として際立つ、この際立った形、地構造の知覚は ne-feeling として益々緊張を高める。この緊張のハケ口は民族の政治的独立と平等との獲得であり、これは民族主義として文化的に与えられる。併し他のハケ口によってこの緊張が解消される時にはこの下位目標は集団全体としては到達されないので、この下位目標の到達まで緊張を持続し、個人的に、同一視等によって、緊張を解消してはならないという必要が生れ、集団は緊

張を速かに解消せしめようとするのではなくて逆に積極的に緊張を持続し高めるように努力する。又かく選定された下位目標に対し新たな障壁が生じ、これを集団全体として通過する為に新たな全員の緊張が同様に要求される。集団全員の緊張の平均の高さと分散の小ささが他面集団の Morale である。

緊張持続の手段の一つは Out-group 成員との接触、Communication の禁止である。この禁止には種々の段階があり、これによって種々の集団の社会的緊張が測定され得る。即ち

(1) その集団の占める空間的領域への交通の難易の程度
(2) その集団の成員と接触し得る形式と程度
(3) 許され得る Inguiry の内容
(4) スパイに対する疑惑と警戒

これに関して Allport-Kramer の実験の示すような、緊張持続の欲求に相応する Out-group との異質性の知覚とその識別に対する注意が考察されなければならない。

この緊張度測定は民族的少数集団のみでなく、種々な集団に対して適用される。併し夫々の集団に就て異質性の強調の必要性と緊張体系が機能的分析を受けることが必要である。

Inguiry の内容の問題は緊張と Personality の構造の問題に導く。

社会的緊張とパースナリティ

江川允通
江川美江
岸俊彦

緊張が非常に高い場合、中心層は内的領域全体に拡がり、緊張は運動領域を突破し、或は将に突破せんとする許りになる。内的領域では分化退行が生じる。少し低い場合、大いな自己制御が起り、これと運動領域と周縁層との顕著な分離が対応すると説かれているが自己制御とは同じ大きさの運動への傾向がこれと平衡しており、これは Projective method によって明らかにし得る。

聯想の例 革命＝しなければならない

一般に緊張の高まりと中心領域の拡がりと対応する。これに分化退行が伴う。是は Inguiry の内容を指標として測定し得る、又連想検査に Project される。

聯想の例 貧乏＝社会制度の改良

併し中心層の拡がりは方向性があると考えられる。又は中心層と周縁層との境界と交ってそれよりももっと強い境界があると考えられる。常識的には文脈の相違と解される。

聯想の例 お父さん＝普通と変らぬ

この境界も突破される前に却て内部の領域と外部の領域との分離が高まる。

是は実在度の相異と相応する次元とも解し得る。緊張はこの次元の分化度を退行させる。

この緊張の方向性は、Personality を欲求の組織体制と規定する時は、その組織の中核を為す主導的な欲求とそれによる組織的体制化を決定するものである。若し緊張が持続し、又 Personality を習性の綜合体として規定すれば緊張の方向性は一つの中心的習性を決定し、高度の緊張はこの中心的習性の強大化と、他の諸習性を支配する生活の原動力化を生じさせる。その結果は、Projective Test に顕著に現れている。それは単に知覚が要求に相応しているということではない Projective test の刺戟は一つのキッカケとなり、それを利用しそれに托して、要するに同じ筋書の事柄が語られる、Personality を圧倒的に支配している欲求とその目標とが語り出されるのである。

之には認識構造の狭小化と rigidifying が対応する。それは特に Ingronp member と Out-group member に関する認識に於て著しく、人は二者択一的に Ingroup memben であるか或は Out-grpup member であるかであって、集団内での個体差は消失する。

集団的性格の力系

阿部孫四郎

Group-mind についてのこれまでの研究は Personality にたいするやり方と同じであった。しかしこうして捉まれるものは集団的性格ではなくて個人的性格にほかならない。身体的なものに於ては個人を調べる方法と、ラテン族とかゲルマン族とか蒙古族とかをしらべる方法とが同じであって差しつかえないが、精神的なものは個我にふくまれるものと、個我の群にまたがるものとの二種あるわけなので、両方が同じやり方では捉えることができない筈である。個我にふくまれる方は Personality で個我を制御して個我群にまたがる方は Group-mind であるから、Personality にたいするとは異なる方法が Group-mind にたいしては別に立てられるべきであると考える。

集団とは何かといえば個我の結びつきである。そこでわたくしは先ず、Topology 的に個我という運動点をふくむ領域を考える。Lewin によれば領域の規定には二つの仕方があって、一つは点の運動可能性の範囲であり、もう一つは質の同一の範囲である。

運動点としての個我の結びつきがつくる領域にあっては、その個我の数が u ならばその領域には I_n 箇の飛島がふくまれる。

$$I_n = \frac{1}{2}(n-1)(n-2)$$

これらの飛島は戒律という意味をもつものであって、個我のどれかがその中に闖入することによって、その領域からいくつかの個我が閉めだされる。だから人数の多い集団にあっては、人数の少い集団よりは戒律の数が少い。社会には荒波という形容が当てはまる程戒律のきびしさがあるのに、小さな集団である家庭には温かさとい

う形容があてはまる程の戒律のゆるさがある。かように集団的性格は、その集団の中に個我が止まる為の前提条件として、戒律の存在が必要であり、且つ大きな集団程戒律の数が多くなるから、従って大きな集団程集団的性格の内包が大となる。集団的性格はこれらの戒律とその領域の質との調査によって研究すべきである。

領域の第二の規定としての質の同一の範囲という点からはまた別領域の下位領域への分化が考えられる。この分化は一つの領域の中にいくつかの異る領域媒質の分節の含まれることを意味する。ひとつの極端な場合として、これらの分節の間の境界が強固で相互の交通の断たれている場合をあげると、領域の質と戒律の質との関係が明らかになる。刑務所では拘禁に対する妨害が最大の戒律であるから、脱獄の準備行動を意味する行為、たとえば釘一本をかくしもつことが最大の罪悪の一つになっている。また学校では評価にたいする妨害が最大の戒律であるから、紙に書かれたものを正当でない方法で盗み読むこと、いわゆるカニングが最大の罪悪の一つで、修学期間の変更という重大な結果をもたらす。

所で実社会にあっては、生産関係その他による社会の質的分化がありながらも、相互の間の交通が可能であるから、同一の戒律にたいして、これらの異質的分節が二重三重に幾重にもその戒律の質を規定する。この質的矛盾は社会的緊張を意味するものであって、そのために個我の行動の間に衝突を生ずる。

文献　阿部孫四郎著『性格調査法』第八章集団的性格
一九五〇、ミネルヴァ書房刊

模倣行動より独立行動にうつる際の環境的手掛りに就て

沢田　秀一

実験目的

如何なる模倣行動が一層完全なる独立行動を為さしめるであろうかという点に就て考察する場合、模倣者が模倣行動中に適切なる環境的手掛りに触接する程度が此の問題解明の重要なる変数となって来ることは明かである。即ち模倣行動中に模倣者の注意と環境の手掛りに差向ける様にする時、後に模倣者はモデルがいない時でも模倣行動の際に与えられたと同様の報償を獲得することが出来ると考えられる。又逆に模倣行動中に模倣者に適切なる環境的手掛りが与えられないとモデル或はリーダーの居ない独立行動場面に置かれた際設定せられた目標に達して報償を獲得することが困難になることが予想せられる。本実験はこれ等の予想をテストする為に実施せられた。

実験状況

二箇の実験場面が設定せられた。

第一場面　模倣者に適切なる環境的手掛りが目に触れる様にし、逆に反模倣者には上述の手掛りに触れる事が出来ない様に実験場面が設定せられた。斯る場合には模倣者は次のリーダー（モデル）の居ない独立行動場面に於て反模倣者よりも一層良好なる成績をあげる事が期待される。

第二場面　第一場面と対照する為に設定せられた。此の場合、第一場面と異る点は、模倣反応に対して適切なる環境的手掛りが与えられず、反模倣反応をなした場合に、環境的手掛りが被験者に触れしめる様に変更された事である。斯る場合には模倣者はリーダーの居ない独立行動場面に於て反模倣者より悪い成績を取ること、即ち第一場面の結果とは反対の結果が出ることが予想せられる。

装置

出発点は各椅子より 2m 離れた所にあり、椅子（二箇）の間隔は 1.5m。椅子の上に蝶番（チョウツガイ）のついた箱が一個ずつ置かれた。各箱（二箇）は蓋は 1cm 開かれていた。（常にその状況に保つため、一本の細い棒がはさまれた）。而して一方の箱の中には蠟燭がつけられ、隙間よりかすかに光る様に工夫された。報償としてのキャラメルは第一組、第二組により其位置を異にして何れか一方の箱の中に置かれた。

被験者

小学一年生五六名で、内二八名は本実験の前に模倣傾向、残り二八名に反模倣傾向が実験的に形成せられた。本実験では、これ等二八人の二組が更に細分され第一場面に模倣傾向を学習したもの一四名反模倣傾向を学習したもの一四名を配して、第一組とし、第二場面に残りの各一四名を使用し第二組とせられた。其他リーダーとして六年生二名が使用された。

結果

紙面の都合上詳細は略されたが、結果は上述の実験目的を大体満足されるものであった。

日本文化の心理 (1)

―習慣の調査―

(1)排泄について

高木　正孝

1、日常生活の実態調査より日本文化を解明せんとす。今回は排便の習慣についての予備的調査を報告する。

2、質問紙法と面接調査を併用し、関東地方の主に都市及びその附近の中流家庭を中心に調査を行う。被調査者一五三名（内男五八、女七七）年令九才乃至四五才。ただし一六才―二〇才の層が五四%を占む、その他別に都内男女中、高生二一五名（一五―一八才）につき調査し前者と比較参考に供した。

3、第一問「大便には毎日何回行きますかの結果は、全体としては一回が八五・五%で大部分である。性別にみれば、男性は殆んど一日一回（九三%）であるに反し、女性は一回八〇・五%であり、男性には二回以上は

全くみられないのに、一日三回、五回、不定は皆女性である。中、高校生に於ても同様。

年齢別にみれば、四一才以上のみが、一日二回が圧倒的に多く一七%、また二六—三〇才の層には二回、及びそれ以上が全くみられぬ。

4、第二問「大便には何時行きますか」については、朝食前四八%、朝食後三六%で朝食前後に多く、男性に朝食前がやゝ多く、女性に朝食後が多い。また夕方、その他には女性の方はるかに多し、年令的には二六才—四〇才朝食後に多く、二五才以下は食前に多い。

5、遺伝性を一卵生双生児集団生活に於ける「健康日記」よりみれば、宿舎が代ったのちの二日間の排便の有無、規則性の一致がみられ、またその型の双生児対毎にその一致が認められ、即ち植物性神経系の型の遺伝性は存在するが、排便の有無、時、回数そのものは、二日以後に於ては全くまちまちで、現境により規定されることを示している。

6、更に我々の被調査者全部が日本式便所を使用しあるを確め、「西洋式と日本式便所とどちらを好むか」を問う。

結果は、日本式が大体好まれている（五二%）。性別には女性に於ては日本、西洋式同数であるが、男性にあっては、日本式が多く、年令的には、二〇—四〇才は日本式をこのむが、一六—二〇才のみが、西洋式を好むものがやや多い。四一才以上は余く無関心である。男女、中学校と同結果である。

7、更に西洋便所の長所短所についての中・高校生のいい分をきけば、

長所としては、(1)水洗のため清潔、(2)臭くない、(3)蠅がいない。(4)汚物が直接目に入らない。(5)疲れない。

短所は、(1)習慣上なじまない。(2)、落ちつきがない。(3)、腰かけると気持が悪い。(4)、費用の点で今日では不適。

8、排池の風習は、家の構造と結びつき、生理的心理的にも制約された比較的保守的な風習の一つと思われる。そのうらには日本文化のイデオロギー的地盤、不浄観の制約もあるのであろうと推察される。

身体運動における片側偏重の問題

——転移との関係——

松井三雄
鷹野健次

一、目的 体育運動やスポーツで、両手を使う技術を教える時は、通常利手の方を先にし、次いで利手でない方の手で行わせる。若し一方の手で学んだ学習の効果が他方の手に波及するものとしたら、利手で学習した効果が否利手側に波及する率と、否利手で練習した効果が利手の方に現れる率と、どちらが大であろうか？ 利手は常に否利手を凌駕するから、否利手を訓練する方が効果的であると言う説もある。吾々はこの問題に関し、フィリップ、ランバートの実験に倣って、鏡映効果に順応する作業の学習を課題に選んだ。

二、実験

(1) 装置、鏡に映して、メタル・ソーティングをさす。メタルの入口は、横列の三つを使い、他は封じておく。メタルの入った度毎に、実験者の手で電鍵を圧し、時間をカイモグラフに記録する。

(2) 方法、被験者を三つの組に分け、右手組、左手組、両手組とする。夫々の組に次の課題を与える。

テストⅠでは、各組同じことをする。24時間後に1、2、3の中間学習を夫々の様式で行う。右手組は右手で、左手組は左手で、両手組は左右交互に、3の試行が終ると一分休み、テストⅡを行う。1、2、3の試行の間隔時間は30秒。

他方、質問紙法により、左利、両手利の者を検出し、被験者から除く。

Test Ⅰ	1	2	3	Test Ⅱ
右、左、	左右手組	〃	〃	右、左、
左、右、	左右手組	〃	〃	左、右、
右、左、	両手の交互のみ			右、左、
左、右				左、右
12 12	12	12	12	12 12

三、結果 結果の整理は、一秒単位で記録したカイモグラフを、秒以下は四捨五入で計算する。

表 Ⅰ

	Test Ⅰ	1	2	3	Test Ⅱ
右組	69.2	46.1	37.9	34.2	43.0
左組	70.7	41.4	39.9	35.7	37.8
左右組	72.7	46.9	41.7	40.8	37.9
F.（5%の F3.83）	0.71	2.54	0.68	4.57	1.77

表 Ⅱ

		Test Ⅰ	1	2	3	Test Ⅱ	$\frac{T_{II}}{T_I}\times100$	t
右組	右	61.0	46.1	37.9	34.2	36.8	62.0	—
	左	77.4	—	—	—	49.1	72.3	2.02
左組	右	65.6	—	—	—	39.1	63.0	0.52
	左	75.8	41.4	39.9	35.7	36.4	52.2	—
左右組	右	69.7	23.6	20.3	20.0	35.7	53.7	1.18
	左	75.7	23.3	21.4	20.8	40.0	55.5	0.45

四、結果の説明ならびに要約 表Ⅰに於ては、Test. Ⅰ Tets Ⅱ のスコアを左右混合で表わしてあり、表Ⅱはそれを右、左別に分析したものである。即ち、

① 表Ⅰより左手練習の組が一番進歩率がよく、両手組、左手組の順になっているが、この差は統計的に有

意でない。

② 表Ⅱより、右手組の進歩率が悪いのは、左手が伴って進歩していないことに原因する。

③ 右手組の右、左手組の左と、両手組のこれに対応する右、左のスコアの間には有意の差なし。

④ 鏡のリバースエフェクトに順応するのに、大きな個人差があることが観察された。

作曲家の心理（Ⅰ ベートーヴェン）

玉岡 忍

大作曲家の素質と環境、体格、態度、風貌、病暦、性格、並に生活歴、影響を受けた人々、作曲の動機、作品の傾向並に作曲過程等を調べ、天才的人間の創作心理の条件を検討しようと志した。今回はその第一歩としてベートーヴェンについての研究を紹介する。以下結論的に要約して述べると（例は殆ど省く）、彼は、遺伝的素質的条件としては余り恵まれず、父は平凡なテノール歌手、母は料理女級の婦人であつた。たゞ一人祖父は楽長として音楽的才があり、且ベートーヴェンと似た性格がある程度認められた。従つて彼の場合生後の生活が一層重要資料となる。彼の幼少年時代は父親の呑代を稼ぐため、天才少年としての無理矢理の音楽生活が強いられている。次に彼は体格頑丈で何処から見ても意志人、努力の人、又悲劇的争闘の中に自らを築いて行く姿であつた。ミケランジェロとナポレオンとの両者の中にある種の類似点を見出すし、又シェークスピアの「リア王」に似た点を思わせるものがあつた。

彼は体格の頑丈なのと逆に、全くあらゆる病苦に悩まされた生涯を送つた。彼の疾患を列挙すると中耳炎、聾疾（これは生涯の決定的なもの）、近視、天然痘、腸疾患、煽衝性カタル、リョーマチ、黄疸、結膜炎、肋骨炎等である。彼の作品の殆んどすべては耳疾後又は聾疾後に作られ、或はその他の疾患の真只中において作曲されたものである。

彼に影響を与えた人々の中で音楽家としては、バッハ、ハイドン、ヘンデル及びモッアルト等ですべて先輩であって同時代の人からは殆んど影響されていない。彼の作品がこれらの人々の影響を受けていることは知るべきことである。

又友人としてはヴェーゲラー、ブロイニング・カルル、アメンダ、リヒノフスキー、シントラー等で、これらの友は作曲そのものよりも彼の心に暖さと力と励ましとを与えた人々である。また愛人としては、ギッチャルディ、テレーゼ等で、彼らから愛と悲しみと、又孤独とが与えられたが、後者は一生彼の心に残り彼の作品に深みを与えた。又詩人ゲーテの影響も忘れることは出来ない。

作曲の動機は、恋愛とその悲劇、運命、望郷、革新への情熱、生命の争闘、歓喜等によるものが多く、わずかに、戦争を讃えるものがある。又曲はその殆んどが恩人、愛人、友人等に捧げられる目的をもつていたが、中にわずかに金のために作られたものもある。

作品の特徴としては努力、建設、悲哀と歓喜又は、それらの相剋的な深刻味を有するものが多い。

作曲過程—彼はインスピレーションを感じたが、それはテーマと気分とに対してであって、全曲を霊感で書き上げる様式ではなかった。又テーマを巧にヴァリエーションに咲かせることに丈け、一つのテーマを異る作曲の中によく生かしている。彼自身は一度作った曲の部分を変えないといっているが、これに反する例が多数ある。又相前後しつゝ同時に数曲を作って行った。

なつかしさに関する一調査

渡辺 秀 敏

一、目的 「なつかしい」「あこがれ」「愛惜」等複雑高次の感情の分化の時期並びにその様相を研究する手がかり的調査である。

二、方法 質問紙法。

三、日時及被験者 昭和二十六年六月 大阪府枚方市立枚方小学校および枚方第一中学校第一—第六、第一—第三学年。

四、結果 第一調査の結果、児童並に生徒は「なつかしい」と言う語を現存的事象に対する快感的感情、現存事象の非存在への移行時の感情（別離の感情）非現存的事象の想起時の感情、その想起が媒介事象を通しての場合及原事象との再会による場合の感情と云う五つの様相に使用していることが見られた。而してこの五つの様相としてのなつかしさは小四に於て七五%見られ、特に後三者の様相としてのなつかしさは男子は中一中二、女子に於ては小五中一間に於て他の様相より分節化するようである。この二つの結果に基づき、小三以上に対して、前述の五様相各五問題を作成しその感情的反応を求めてその中に「なつかしい」と言う語の使用頻数を求めた。その結果、想起再認時の感情として「なつかしい」と言う感情が分節化する時期は第一調査と同様、男子中一、中二、女子小五小六の時期に見られる。次に内容的に分析すると第一調査に於て想起一般に対する感情と解した被験者は小五に始めて見られ、漸次増加して居る。第二調査に於ては19問14問15問に最も多く用いられて居る。概括的に云うと自己の過去の歴史に密接に関係を持つものに対して「なつかしい」と反応する率が大であり、又想起一般に関する場合も比較的に多い。而してより一般的なものの方がより特殊的なものより多いことが看取される。

尚、悲しい事、つらい事の想出に対して「なつかしい」と感じ、且反応するのは小六以後特に中二以後にしか見られない。

五、反省 方法論的に吟味の上問題の組合せを検討し決定的結論を齎したいと思う。

教師のパースナリティーと教科

相　川　高　雄

(1)、教師のパースナリティーが、生徒にどのようにうけとられているか。教師の教科指導、特に担当教科と生徒の教科に対する好嫌いの関係を通し、この関係を明らにしようとした。調査は中学生二八四名（男一五九、女一二五）に対し、次の如き質問紙を、調査者自身が提示し、その解答を求める方法によった。

問一、(1)現在好きな教科　(2)理由
問二、(1)現在きらいな教科　(2)理由
問三、(1)現在好きな教師　(2)理由
問四、(1)現在きらいな教師　(2)理由
問五、(1)現在すきな教師の担当している教科　(2)理由
問六、(1)現在きらいな教師の担当している教科　(2)理由

問七、(1)小学校のときすきであった教科　(2)理由
問八、(1)小学校のとききらいであった教科　(2)理由

質問紙の構成は、奇数問は、すべて好きな要因（即ちプラスの要因）、偶数問は、すべてきらいな要因（即ちマイナスの要因）となるようにした。

(2)、上記の質問紙による解答の結果を、問一の一、と問五の一、問二の一と問六の一、の関係により、好きな教科と好きな教師の担当教科の関係、並びに嫌いな関係を明らかにし、問一の一、と問七の一、問二の一と問八の二の関係により、現在の教科に対する態度と、小学校におけるそれとの関係を明かにした。関係を見るために Spearman の Method of Rank-Rifference による

$$\rho = 1 - \frac{\sigma\Sigma(u-v)^2}{n(n^2-1)}$$

を求めた。

(3)、その結果、好きな関係（プラスの要因）の方が、嫌いな関係（マイナスの要因）よりも、一般に相関度が高い。

各問の相関表を示すと次の如き関係になる。

	男	女	計
問一と問五	○・七五	○・七七	○・八五
問二と問六	○・五七	○・六八	○・六三
問五と問七	○・八一	○・六二	○・七五
問六と問八	○・四九	○・八六	○・七四
問一と問七	○・九二	○・八八	○・九〇
問二と問八	○・八八	○・八六	○・九五
問一と問六	—	—	○・六八
問二と問五	—	—	○・五一

この結果より次のことが示唆された。

現在好きな（嫌いな）教科と現在好きな（嫌いな）教師の担当している教科との関係は、小学校のとき好き（嫌い）な教科と、現在好き（嫌い）な教科との関係よりは相関度は低い。

つまり、小学校のときの教科に対する好嫌の感情は、現在まで比較的恒常的に持続され、現在の教師に対する好嫌いの感情よりは緊密度が高い。

現在好きな（嫌いな）教科と現在嫌い（好き）な教師の担当教科との関係は、現在好き（嫌い）な教科と現在好き（嫌い）な教師の担当教科との関係よりは、相関度は低い。つまり、現在における好（嫌）きな教科の関係は現在における教師への好（嫌）きな感情とそれぞれ固定した対応関係を持ち同要因の関係が、異要因の関係よりは強い。

師弟の間柄の心理

木　村　俊　夫

教育は「師—弟」という「人格—人格」の間柄に於いて成立するとすれば、教育心理は常に右の間柄の心理を基調として展開するものと考えるべきであろう。例えば教室に於ける学習を考えて見る。これを具体的に把握する為には、単なる学習理論だけで事足りはしない。学習する生徒のその学科に対する好悪が先ず考えられるが、学科好悪の大部分の動機はその学科担当の教師に対する好悪によって決定される、という事実を顧る時、そこに師弟の間柄の心理というものが、教育心理の基調として働いていることを認むべきであろう。教育心理学の第一の仕事は、師弟の間柄の心理の解明であらねばならぬ。

ところで、此の間柄の心理を考察するに当り、それを生徒の意識内に於けるそれ許りを追求するのでは片手落ちで、その反対に教師の意識内に於けるそれをも追求せねばならない。従来の教育心理学は、生徒の心理を追求することには、不充分乍ら相当の努力をして来た。然しその反面、教師の心理に就いては、特に生徒との間柄に於いて捉えられているものは殆ど無いに等しい。本調査は不充分ではあるが、間柄を構成する一方の極としての教師に就いて、生徒との関連に於いてその心理を追求しようとしたものである。調査の結果の数字によって調査しようとする方向の一部を提唱しようとするのが本発表の主旨である。

青年期の興味について

竹　田　俊　雄

青年期、ここには女子の中学校時代より高等学校時代にわたる興味の発達について若干の考察を試みる。

方法は質問紙法、調査の時期は昭和二十六年四月—六月である。

中学校時代、高等学校時代に「どういうことにあこがれていたか」を大学生について調査した結果は、現象的・表面的なものえの興味が強く示され（たとえば音楽家ということに対しても、美しいドレスをきてステージに立つこと等）、次第により本質的なものに移っている。「好きな映画俳優」について中学生、高等学校生につい

て調査した結果は、同性の年少なものより異性の年長なものへの変化が見られる（たとえばマーガレットオブライエンよりトムドレイクへ）。

「日曜日をどのようにして過すのが一番たのしいか」について、中学生、高等学校生について調査した結果は、年長になるにつれて活動の範囲はひろまり、レクリエーション的な活動（たとえば映画を見るその他）は大いに増加し、社会的な活動（殊に家族と外出する等）は減少する一方、家事的な活動（たとえば編物裁縫等）は増加する傾向が見られる。

要保護癖の心理学的意義について

鰭崎　轍

要保護癖（要保護性）とは問題・非行・及び非社会性・反社会性の総称であり、問題少年・要保護少年が社会に於て示している社会的な徴標であり道徳的観点から見られたものである。

所謂犯罪少年は法に触れる行為を為したるが故に犯罪少年とされるのであるが、彼等は犯行自身の他に実は様様な要保護性を示すものであり、浮浪児、街娼少女、家庭内の問題少年等も様々の要保護を示している。而も少年保護とはこれ等要保護性の解明を単的な目的としている。従ってこれが解明の一助にもと思い今回の報告を行った。

即ち社会的徴標検査用紙（教育衛生研究所編）を用いて要保護少年検診に引続き要保護癖検査を行い一般、犯罪少年（男）四四二名、浮浪児（男）一〇六名、売春法違反少女五〇名、家庭での問題少年男一三一名の結果を整理した。

犯罪少年では遊び事、耽溺癖・徒費癖・家出癖が特に多く、家庭外癖・作話癖が比較的少い。浮浪児では盗喰癖・耽溺癖・学校怠休癖・賭事癖・徒費癖・家出癖・浮浪癖が比較的多い。売春少女では耽溺癖・家庭内癖・徒費癖・家出癖が多く、賭事癖・作話癖・盗癖・浮浪癖が比較的少い。家庭内問題少年では買喰癖・盗喰癖・耽溺癖・学業怠休癖・家庭内癖・徒費癖・金品持出癖が比較的多いのがみとめられた。

かように要保護少年は物を盗んだとき発見されゝば犯罪少年であり家出したときに保護されゝば家出少年であるが、実はその同じ少年がその他に多への要保護癖要保護性を同時に具備している。従って少年保護は少年の有する各種の要保護性総べての解消こそ真の目的とせねばならぬ。しかしながら社会的徴標たる要保護性は心理学的精神病理学的検診の直接対象とならない。従って私共はこれ等社会的徴標は如何なる心情的機制によって発現するかを明かにせねばならない。而して私共は一九四八年以来少年の心情検診術式並びに検診結果を報告しつゞけて来たが、その結果要保護少年は、情感・思考・意志の障碍即ち情意的方面に於ける変調障碍と精神作業能力の低下を二大徴標として示してはいるが、精神病者が心情的障碍が非社会性反社会性として一般人の目にふれる如く要保護少年も社会的徴標としての非社会性・反社会性として人の目にふれる。即ち心理学的精神病理学的には要保護癖（要保護性）とは心情的変調並びに障碍が社会という場面において自ずと発現した少年の社会的徴標である。

従って私共が要保護少年を心理学的・精神病理学的立場から研究して行く場合、その研究対象は要保護性自体ではなく少年の心情状況更にはその変調障碍の状況であると考えるのである。

家出癖及び学校怠休癖について

鰭崎　轍
佐伯　克
服部　清

近頃不就学とか長期欠席ということで問題とされている学校怠休癖と家出癖について心理学的・精神病学的解明を要保護癖解明の一例として取りあげ、この要保護性の心的機制を明かにしたいと考え、要保護少年三〇〇名の問診結果を報告した。

学校怠休癖は精神作業能力の面からも単にこれが低下したというだけでも勉学能率挙らず、遂には登校の興味を失い怠休するという場合もあるが、要保護少年は昨年の応用心理学会大会に於て報告せしごとく情意変調と精神作業能力の低下とを具備するものであるので両々相俟ってこの要保護性を生ぜしめるものである。特に情意変調徴標との関連を問診結果についてみるに、過感性・不安定性・気分易変性・意志欠如の変調の発現せるものと認められるのが比較的多く、爆発性・強迫性・自己不確実・爽快性・粘着性・内閉性によるものは比較的少い。しかしながら情意徴標の各々についてみるに学校怠休癖という社会的徴標として発現する可能性は何れもありうることであって各徴標ともに散発的瀕度を示している。

家出癖については情意変調徴標との関連をみるに、気分易変性・自己顕示・爆発性・過感性の変調が社会的徴標として家出癖と発現することが比較的多く、強迫性・爽快性・意志欠如・内閉性の変調の場合は比較的少いことがみられる。しかし前にも述べた如く他の情意徴標欄にも頻度が散在し、又理論的にもその可能性は当然認められうるのである。何となれば情意徴標の或るものが変調状態に在るときそれは当然社会という場面に要保護性と言う形態に於て発現せざるをえない。それは精神病者が情感思考意志の面での障碍をその何れか一方にでも所有しているならば、それは直ちに社会という場において非社会性変社会性として発現せざるをえないのと同様である。

従って要保護癖の心理学的精神病理学的解明、それが機制究明の一例として取りあげた本研究を通して、我々

の研究対象は個々の要保護癖自体ではなく、要保護癖として発現している心情的状態であり、要保護癖の解明とは如何なる情意徴標や精神作業能力の低下度が如何にして或る要保護癖として現れて行っているかの解明であり、要保護癖の解消とは、その要保護癖発現成長の機制を心理学的精神病理的原理に基き独自の専門技術により、それが機制の壊滅を行うことであると考えた次第である。

ある性犯罪少年の精神鑑定例

野口　晋二

東京井之頭公園附近に於て、性的犯行を繰り返し、強制猥褻、暴行、脅迫、傷害、窃盗事件に問われた二十一才の男子の精神鑑定例。

犯行は、

1) ズロースを窃取する行為七件。物干から窃ったもの二件。他は、通行中の小学生等から強奪、多くは、直ぐ捨てて了ったが、自ら着した事が二回ある。

2) 通行中の少女の臀部その他を、いきなり傷けた行為五件。

3) 便所掃出窓硝子戸を盗み直ぐ捨てる行為二件。

之等は、被告本人自身も予期出来ぬ衝動的、機会的な犯罪であり、所謂性的興奮を伴う事なく、自分でも、どうしてそんな気になるか判らぬと云う無自覚な行為である。

被告の性生活は極めて遅れて居り、自我の発達も遅滞した小児型人格者である。鑑定時被告は、精神病でも精神薄弱でもないが、情意の異常顕著で、気分易変、過感、内閉、強迫、更に自己顕示、抑鬱の色彩も混えていた。その内、特に気分易変が著明で、之が、主動となって、フェシズム並にサジズム的犯罪を反覆せしめたものである。

一虚栄人の殺人

特にその犯罪と環境

青木義治

機会犯罪は慣習犯罪に比して環境的因子を重要視しているが、然し尚本人の示す性格素質の傾向や環境に反映する個性の差異を無視する事は出来ない。環境的因子、特に対人関係に対する影響の内、感情面の反応に就ても此の事が云い得るであろう。

私は最近二六才の一青年がその恩師を毒殺した事件に就て、彼の家系生活史等を詳細に調査し、これら性格素質と環境との関連性に関し特に対人関係を中心に検討考察した。

彼の家系が精神分裂病や精神病質者を有する家系であり本人がかゝる素質を全く遺伝しないとは断言しない。然し彼の性格構成については、出産時母の実家で人工栄養で育てられ祖母に甘やかされ家に帰ってからは両親よりも女中等になつき、ちゃほやされ我儘で、偏食の習慣となり、更に父の性格がかもす彼の家庭の雰囲気、父からの態度摸倣等から独善専制的な虚栄人となる一歩をふみ出した。小学校から上級学校を経過するに従い、この性格は一層著明となって展開された。然し就職後は職員との変愛問題等から職員と反目し合い職長とは最初親交はあったが彼と恋人との三角関係から離反し、研究の事、結婚後の慰謝料の請求や支払等の事が次々とからみ合い、彼が職長に対する悪感情は重積され、遂に直接不勉強や品行不良を理由として退職を要求され、あまつさえ慰謝料の未払分の請求をせまられ、彼はこの悩みを誰にも打あけず遂に犯行に及んだのである。当時軽度の躁うつ病様状態を呈していたが、かゝる反応症状を引おこす素因としては彼の感情過敏性な虚栄性格もあずかって力があった事は否定出来ない。

然し一方彼の周囲を取りまく環境の内で特に就職後の生活で、彼の家庭との結びつき、両親や妻の態度や、一方職場の雰囲気や、先輩同僚異性等の生活態度や、研究というものと名誉心の事、学閥の事、経済問題等にからんだ感情問題にも必ずしも感心出来ない悪条件があり、更に職場の長としての指導性のたりない事、特に責任の地位にある者としての公私の混合や、経済会計の事や、更には対女性問題に就て彼の感情はその犯行に一層拍車をかけたものと云い得る事が出来よう。

恩師を殺害する事は何人といえども許すことは出来ない犯罪とは謂うものの、然しかゝる機会犯罪の場合に何故にかゝる犯罪が行われたかと云う事の根拠には、こうした心因のよって来った環境条件を正しく精査し、正しい観点に立って判断する事が特に必要であると共に、環境面からの犯罪構成を考察することの重要性を強調する。

双生児に関する一研究（第一報）

中村弘道
中島昭美

目的　双生児法は性格研究の有力な武器であり、ことに性格形成における遺伝的条件と環境的条件との役割と意義とを明かに決定するために極めて貴重な研究方法である。従来ソーンダイク、フェルシュエルをはじめ多数の研究者が一卵性双生児に種々の心理学的検査を実施して、その類似度の高い部分と低い部分とを定め、夫々の機能の遺伝規定性と環境規定性の比率をもって、遺伝素質が性格形成に対し演じている大きな役割りを明かにしている。本実験は、(イ)既知の実験方法を双生児に施行することにより、その類似度を通して性格形成の諸条件を明かにし、(ロ)双生児の対偶者間における実験結果の一致度を比較することにより実験方法そのものの価値を吟味することを目的としたものである。

方法　上記の目的により、双生児に Rorschach Test を施行した。

(1) 用いた図版は、原版でなく、戸川、本明両氏の改訂版（原版から黒一枚、色のついたもの一枚を抜いて合計八枚）である。

(2) 被験者は東大付属の中学校に入学を希望した双生児二一組（男一一組、女一〇組）である。

(3) 整理方法は大体 Rorschach の原法に従ったが、別に被験者の出身校から九校を抽出して男子八〇名、女子六〇名、合計一四〇名に対し、Rorschach Test を施行し、その結果を整理して標準を定め、更に戸川氏の反応語の頻度表をも参考にして、双生児の反応の分類解釈をおこなった。

(4) 双生児の出身校から、同じ組、年令の児童を random に二人ずつ、男五組、女五組計一〇組を選びだして、双生児の結果と比較した。

結果　上記の方法により

(1) 反応を分類して、各項の対偶者間の%の差を考えた場合、双生児の対偶者間の差の方が random に選んだ二人の差よりも小さい。

(2) 把握型、把握の継起についても双生児間にやゝ高い相似度がみられるが、休験型においては低い相似度しかえられない。

(3) 同一部分に反応した時示す反応語に関しては双生児の方が遙に高い相似性を示す。

(4) 知能検査の総得点の差の大きい双生児は、Rorschach Test においても大きな偏差を示す。

双生児研究（第一報告）

円山槇雄　他三名
山崎正
中村安作

本研究は円山が文部省より依託されたツベルクリン反応の遺伝体質に関する研究に連関して出発し、双生児法によって医学的、心理学的、教育学的研究が綜合的になされようとするのである。今日まで県下にわたり各学校への質問紙による調査を二回。人類学的、医学的、心理学的調査のための集団的研究が二回、実験的個別的研究が常時なされて来た。集団検査には第一回に三五組、第二回に二五組集められた。その外に個別的に六組が詳しく実験されている。今日までの綜合的研究結果の一部を報告する。

(1) 福井県下の小中学校に現在そろって在学する双生児数は二一〇組以上で、それは六八〇名に一組という割合で、少くとも六五〇—七〇〇人に一組ということが確実に推定される。

(2) 指紋はE・Zの方がZZよりも、その一致度が高いが、歯や手半月など、同様に卵性診断上左程重要ではない。

(3) 円山らを中心とする福井保健所々員は手根骨の化骨状態を卵性診断上重視すべきものと考えている。即ちその化骨状態がZZの方に差異性が充分認められる。特に青年期に近ずく頃に。

(4) 今日の知能テストその他のテストによれば、E・ZとZZとの間の決定的な差を引出すことは出来ない。E・Zの対偶者間にも可成の差がある。

(5) 情意的面は知的な面よりもE・Zの対偶者間に類似性の度が高い。

然しそれは Gottschaldt のいうような知的な面はより環境的で情意的面はより素質的であると断定することは問題が多いと考える。

ただ情意的な面は早く固定することは明かである。

(6) P・Zを含む二卵性の対偶者間の不一致性と一卵性の不一致性を比較して遺伝と素質との関係を論ずることは問題である。同性の双生児についてのみ比較研究がなされねばならない。（一九五一・七・一〇）

逆行性健忘症の一例

岩佐金次郎

遺伝歴として、父系イトコに精神薄弱症を有する疑い（調査したが明確に知り得なかった）及び母系大叔母にロウア者が居る。患者は、八才より九才頃まで「ねばけ」ることがあり（一年二—三回）一二才及び一三才時に、いわゆる「引きつけ」が計三回あつた。その他現在に至るまで、著患をしらず、栄養中等度、細長型、大正一四年、東京に生れ、工業学校を経て、海軍技手養成所を修了、海軍軍属として、海軍航空技術廠製図課に勤務していたが、終戦後、暫く勤めて居た進駐軍自動車部門の職場を離れてから、定職なく、二六年一月中旬以来、「花札トバク場」に働くようになつた。併し、ここは、彼にとつて、「早く他の正業を見付けて、こんな処にいたことを忘れてしまい度い」と希うような環境であつた。又、結婚生活に於ては、妻及びその家族に対する不満から、幸福ではなく、寧ろ、旧い女友達に、心がのこつていた。四月九日からは警察に検挙される虞も生じてきていた。一二日には友人から金銭上の不義理を責められ、昼頃より、身体的に「疲れたような」不調があり、「気が沈んだような、イラ〳〵するような」気分になり、妻に対して「遠くへ行つてしまいたい。どこかで職を得たい」と洩していた。一三日朝、宿舎を出で徘徊数時間の後、一三日夜警察に保護され、一四日夕刻、入院した。脳波、尿屎、血液像、脳脊髄液、血沈等に著変なく梅毒血清反応は沈降反応（＋＋）、視野検査所見は僅かに、狭容を示した。電流性皮膚反応、各種心理検査を施行したが、入院当初は、知識判断力が著しく悪く、新聞は正読しても、内容は全くわからず、全生活史を忘却し

ており、感情不感性であつた。家族、友人等と数回面会したが認知出来ず「自分との結びつきがピントこない」と云つている。記銘力、注意力は異常なかつた。四月二九日、五月一日、五月三日に、電気衝撃療法を実施、四日朝より、全て追想可能となつた。併し、三月一二日、一三日、一四日、一五日、一六日頃までは不明確の部が、諸々にあり、それ以後に於ても、部分的に、追想出来ないことがある。一三日朝の数時間は、未だに全く追想出来ない。五月二九日、全治退院し、六月五日以来、兄の店を手伝つている。七月二日、更に診たが異常なかった。ただ退院後二日許りは疲れやすかつたと云つていた。

逆行性健忘の一例(その二)麻酔分析

曾根　良彦

本症例に対し記憶の恢復の各時期に於て麻酔分析を試みた。第一回は入院直後、第二回は入院後六日目、第三回は入院第一〇日、第四回は電撃後約一〇日で記憶の全く恢復した時期であつた。方法は Amybal, Amybal と Cyclopan の混合液、Isomytal の一〇%溶液を静注し Pre nartoticstate に引き入れて主として、一問一答の形式で質問した。一回から三回迄は過去の追想が出来ない状態にあるにもかかわらず、活潑に自己の生活史に関する事項について答えた。しかし自己の名前、現在の職業等自己と密接な関係を有する事に関しては聞き出す事が出来なかつた。又、自己の生活史として述べた事の内多くは事実か事実と何らかの関係を持つもので構成されては居るが、それは時間的、空間的にも雑然としていて楽しかつた経験とが望ましいと思われる様な事柄が事実、或は現在として語かられた。

又、今回の発病の動機と思われる最近の出来事に関しても、強く拒絶したり、又言を左右して回避する態度をとつた。

又先ず抑制から解放されるものは患者にとつて周辺的な事項で例えば自己の姓名は恢復後迄思い出す事が出来なかつたにもかかわらず、父の職業、何才で死亡したか母は何才かと云う事を正しく答えている。

要するにこの症例に対しての Narks interview の結果に多く真実と異つたものであり、客観的な根拠なくしては生活史、原因を探る事は出来なかつた。

G・S・R 及び EEG

相場　均

この患者についてG・S・Rは五回(怖復前三回、後二回)、EEGは四回(恢復前二回、後三回)検査を実施した。

G・S・R第一回(恢復前)では反射は正常にあり、自発性反射はない。音刺戟の反復による反射率統率つまり $\alpha=0$ で、

$$\frac{\text{精神刺戟による反射}}{\text{音刺戟による反射}}\times 100$$

つまり $\beta=198$ で、こうした結果からみても情緒的反応は充分あると考えられる。この他、全く記憶が再生出来ないはずの心因に関係した精神刺戟で可成大きな反射を示す場合があった。(五月一五日)

G・S・R第二回(恢復前)これは患者の妻との面会の時で、妻以外の人々をコントロールとして面会させた。この際、妻にあっても妻であると認知せず、G・S・Rの動揺は他の人のと変りなかった。たゞある特定の人に対して「見たことがあるようだ」と言って大きな反射と呼吸曲流の乱れを示した。(五月二四日)

G・S・R第三回(恢復前)では、第一回と同じような結果を示したが、心因以外の精神刺戟でも反射を示すようになり、はっきり心因との関係をみきわめにくかったが、それでも、心因に関係があると思われるものは比較的反射が大きかった。(五月二八日)

G・S・R第四回(恢復後)こゝでは「英語が話せるか」「奥さんと仲よかったか」「犯罪に関係があったか」などで大きな反射を示し、他では全く反応しなかった。(六月一五日)

G・S・R第五回目(恢復後)固有抵抗が大きくて反射はみられなかった。(七月二日)

E・E・G第一回から第四回にいたるまで、特に異常を認められなかった。始から暗算開眼などによる α 波の抑制は著明で、部位差、左右差も認められない。たゞ恢復後は平均振幅が約一〇%程増加し、前にくらべて中枢性興奮が高まっていると推定された。

結論

① G・S・Rによって、恢復前も充分の情緒的反応があると考えられる。

② G・S・Rで恢復前も、心因に関係ある精神刺戟をあたえると反応することがある。

③ G・S・Rで、恢復前でも、他人から色々の知識をあたえられると、それが心因に関係なくても反応を示してしまうことがある。

④ EEGでは特別な変化はないが、恢復後は平均振幅が約一〇%増加している。

(これらの検査は国立東京第二病院藤森聞一博士と同院生理科医員の方々の協力によって出来たことを附記して感謝の意をあらわします。)

逆行性健忘症の一例

——心理的諸検査について——

清原　健司

一、検査種目、方法及び実施回数

(イ)、智能検査：慶大式臨床智能検査を入院当初二回、その三日後鈴木 Binet 式一回。回復後鈴木 Binet 式一回、脳研式一回実施。(ロ)、精神作業検査：Kräpelin 内

田法による加算作業を回復前後に各一回、回復後検査には呼吸記録器を附す。(ハ)、連想検査：早大式刺戟語表による検査各一回、回復前に特定の刺戟語を選び自由連想、制限連想を実施。(ニ)、Rorschach 検査：同一方法で各一回。(ホ)、T・A・T検査：Murray の図版及び Instruction によって各一回試行 (Free Association)。

二、結果及び所見

(A) 回復前に於ける精神特徴 (イ)、智能は入院当初に於て知識・判断に著明な欠如が見られたが二日後の検査では全く良好となり、鈴木 Binet 式では得点六八でむしろ高い知能であった。(ロ)、精神作業においては作業量三四―六六で高く曲線特徴は休前終末に軽度の興奮、及び休後に弛緩下降が著明であり、作業障碍を認めたが全般的には定型に準ずる経過である。(ハ)、連想検査に於ては外連合的な連合が七三%を占め心情連合叙述連合は僅少、間接連合は一二%で極めて多く、全般的に病的な連合とは云えないが間接連合は異常に多くこの点は Complex を暗示するものと考えられる。(ニ)、Rorschach 検査の結果は反応語極めて少く断定的ではないが 1B, 0FB の B_2 型で且第V の図版は反応欠である点は何等か異常の色彩反応即ち情緒的順応の異常を示すものと考えられる。(ホ)、T・A・T検査の結果は物語りの内容が非現実的で不幸な結末に終るものが多く見られた。(ヘ)及び(ホ)は内向的な傾向を示すものと考えられる。

(B) 病前の生活に関する調査

(イ)、連想検査によって恢復前早大式刺戟語に対する特異な反応語の示されたものにつき検査した結果いずれも反応時間の遅滞が認められた。市の名前を連想せしめた結果は関東地方が多く、町の名前は湘南方面が多く、村の名前は殆んどわからなかった。これは患者の生活地域を略暗示したものと見られる。(ロ)、T・A・T検査に於ては三角関係、夫婦関係、事業失敗、勢力争いなどが問題になり。連想検査と併せて考える時、患者の心因と見られるものは恋愛、夫婦関係、職業上の問題などであることが推測される。

(C) 回復前後の比較では知能及び作業は殆んど変化が認められず、Rorschach 検査では B_1 型から FB_2 型へ移行しているがこれは外向的になったと考えるよりむしろ色彩反応の正常になった状態と見られる。連想検査では傾向は全く同様でただ間接連合は半減しこれも正常に帰ったものと見られる。TATでも現実性の恢復、自己反省的叙述が見られた。

逆行性健忘症の一例（総括、考察及び結論）

塩入円祐

本例には強い心因（不快な職業とそれから脱出したいという煩悶、秘密事件の曝露えの恐れ等）と更に発病前の徹夜という身体的副因が加わり、突然朦朧状態に於ける徘徊という形で高度の意識障碍が出現した。その後、自己の全生活史を忘却するという特有の記憶障碍を示し、更に受動性、前行性健忘、離人症の如き自我障碍に基くと推定される症状を生じた。記憶には情緒と自我に結合し、時間的配列をなす狭義の記憶としての追想と、情緒、自我との結合がなく体系的配列をなす知識があると考える。本例ではこの自我に深く結合する追想に高度の障碍を来し、更に知識にも及んだが直ぐ知識的障碍は回復し、失語症的症状は全く認められなかったものである。

要之、心因と高度の意障碍障の後に、自我障碍と解せられる記憶の特殊の再生制止並びに他の自我障碍に属する症状が認められ、この健忘は睡眠剤の一種を注射する麻酔分析により一過性に解放され、更に其の後の電撃療法によって完全に回復した。

皮膚電気反射の現われ方について

本間三郎
山中和

皮膚電気反射は往時精神電流現象なる語で呼ばれていたが、一九二八年 Gildemeister により唯の反射と確認されて以来、中枢との関係を論ずる一方一つの末梢反射として生理学上の大きな課題となるに至った。

皮膚電気反射は遠心性インプルスにより皮膚の電気的分極性の変化が起り、その見かけの電気的抵抗が減じて、皮膚を通して通流する回路の電流が一過性に増大する現象である。従って皮膚の電気的分極性の状態如何によって、皮膚電気反射が増減して現われる筈である。皮膚の分極性のレヴェルを変化せしめる方法として、直流通流電極作用（鈴木正夫、環境条件と生体興奮態度、日新医学、三五、一九二、一九四八）を用いた。この電極作用とは、強く又は長い通流が電極下の生体に起す作用であって、その中陰極下では細胞限界膜を弛めてそのイオン透過性を増大せしめ、分極性を低下させ、陽極下では分極性を高めるものである。このことは次表Rの大小によって知る（本間三郎、人体皮膚の電気的分極について、日本生理誌、一二、二六一、一九五〇）。かくて正常の状態並びに本作用のFにおける皮膚分極性のレヴェルを知り、その際の皮膚電気反射の大きさを観察したのである。皮膚電気反射の測定は市販の精神検流計（YEW製）を使用し、反射生成は光及び深呼吸刺激をもってしその大小を電気抵抗（△R）に換算した。

Rは前述通り分極性の大小を判定する一つの因子であって残留抵抗と呼ばれ、皮膚の見かけの電気的抵抗である。次表で分る如く陰極通流でRは減少し、通流を断ったのち回復している。即ち陰極通流は皮膚の電気的分極性を低めておるに他ならない。さてかゝる状態では皮膚電気反射△Rは如何に現われるかというに光刺激によるも

皮膚電気反射の変化（単位はKΩ）

	正常			直後		
	R	光刺激△R	深呼吸刺激△R	R	光刺激△R	深呼吸刺激△R
陰極直流	70	2.0	1.1	21.6	0.3	0.3
陽極直流	42	0.5	0.2	11.7	0.1	0
陰極直流	105	6.2	6.7	140	11.6	22
陽極直流	95	1.3	3.1	109	2.1	13.1
陰極直流	80	1.5	0.6	38.5	0.6	0.3
陽極直流	84	0.3	6.6	2.4	0.2	0

深呼吸刺激によるも共に反射は小さく現われている。陽極通流においては全くこの逆である。即ち分極性のレヴェルにおける変化、即ち反射は、両者共著明に現われ、陰極作用はこれを減少せしめ、陽極作用はこれを増大せしめる。

従来本反射測定のために通流は手掌を陽極にしておるが、これは測定に要する通流の陽極作用により反射がよりよく現われることによるもので、経験的に知られて採用されたものであろう。

本実験は反射生成機序の一端を研究し、合せてこれが心理学その他の皮膚電気反射の際に通流作用を先行せしめ、反射生成を調整しうるという応用の一途となるであろう。

児童に対する親の理解度の一考察

中川昭則

児童の理解は単に学者や学校教師のみに課せられたものでなく、家庭は云うまでもなく社会人すべての務である。而して学校における不適応児の中に家庭、或は社会からその要求が阻止され抑圧された結果にもとづくものと診断される者が多い。そこで今此処に不適応児N・M二名をケースとしてそれ等児童の要求が両親の如何なる態度で拒否されているかを知り、これをもつて親の児童に対する理解の一資料にしたい。資料蒐集は主として児童の報告による。

（第一表）

要求分類による満足、拒否、の頻数表

分類	M児 満足	M児 拒否	N児 満足	N児 拒否
1、所属の要求	六	一一	六	九
2、成就の要求	五	一一	四	一一
3、経済的保証の要求	九	七	六	一〇
4、独立の要求	二	八	二	四
5、愛情の要求	五	八	四	八
6、良心の要求	四	八	一〇	四
7、社会承認の要求	六	九	九	六
計	三七	六二	四一	五五
総計	九九		九六	

第一表は、児童の要求を分類し、それを満足と拒否とに分け整理したものである。而して親の拒否に就いては次の三点が問題になる。

㈠ 両親共に拒否的態度をとるか。

㈡ 片親のみの拒否にあたって異性の親か同性の親によるか。

㈢ 拒否しない親の愛情の程度。

これらの問題によつてみると、両児童共大差なく両親により拒否されている。更にその拒否的態度をまとめてみると、第二表のようになる。

拒否の回数からいうと、M児は同性の父親が多く、N児は異性親が僅かに多い。態度としては、M児は父の体罰による拒否が多く、N児は母親の叱責によることが多い。

M児の家庭は家族六名、父は、酒飲みである。N児は四人兄妹中三男で母が口喧しく近所の評判も悪い。

（第二表）

両親の拒否的態度	M児 父親	M児 母親	M児 計	N児 父親	N児 母親	N児 計
叱責	八	三	一一	六	九	一五
体罰	一六	二	一八	五	八	一三
新課題	八	二	一〇	二	四	六
皮肉・嘲笑	二	一	三	三	三	六
無視	四	五	九	一	一	二
注意	〇	一一	一一	七	六	一三
計	三八	二四	六二	二四	三一	五五

こうした家家で育てられ、要求が多く拒否されるM児が近所で腕白大将になり学校で友達をいじめる如き反抗的行動傾向を示すのは、こうした親の冷酷さに対する補償行為としてみることができる。一方N児は内的な性向の上にこうした拒否により自分の存在を過小視して不安に包まれ、何事にも積極性を示さぬ劣等感保持の不適応性をもってきたと考えられる。

児童の報告の一つ一つの記録の中にM、N児の両親が如何に児童を理解しているか、更にその態度が児童の人格発達に、如何に影響しているかの一端を伺い知ることができる。

（統計は昭和廿五年七月廿一日より八月廿五日まで）

保護者の教育的関心の方向

中村陽吉
三木清子

本報は家庭生活の場に於ける児童と保護者との生活的関連速度の調査を中心目的として実施した質問紙調査の部分的結果についての報告である。調査は本年二月に実

施し、対象は東京都港区内の某小学校二年――六年生二八四名の学童の保護者である。本報で用いる材料は、

a)、今学年を回顧して教育、躾の面で何か御子様に注意を与えた事がありましたか。（イ、なかった。ロ、あった）

b)、主に注意を与えた人は誰でしたか。父、母、其の他

c)、主にどんな事について注意を与えましたか。学業、健康、交友、遊び、礼儀作法、性格、其の他

（該当項目に○印、いくつもあったら全部印をつけ、特に重点を置いたものは◎印とする）

の三項についての回答傾向から得たものである。結果を概括すると先ず、a)項では全体として約九〇％が肯定であって、対象中の大部分は一年間に何回か教育、躾上の注意を児童に与えているようである。b)項では全対象中四六％は母が注意を与えており、父はぐっと減って一四％を占めているにすぎない。c)項については六コ（其の他の項を除く）の各項目の被注意率を見ると全体としては学業、礼儀、健康、性格、遊び、交友、の順に率が減少しており、多くの保護者は学童の学業、礼儀作法等に主に関心を向けているようである。この各項目の被注意率の変化を児童の性別、学年別、及び注意を与えた人の種類別に見ても、その順位に顕著な差異は認められなかったが、父と母で男子と女子に対する態度に多少の差異があるかに見受けられた。

次には上述の如き教育的関心の方向を保護者をして決定せしめる直接的因子は何かを考えなければならぬ。例えば何故に或る親は自分の子供に学業についての注意を与えたかという様な事について考察を行わねばならぬ。

この点に関し我々は今回は特に学業の項について、その被児童としからざる児童との学業成績を比較して見た処、学業成績の平均値に於て被注意児童群よりも然らざる児童群の方が優れている事を見出した。又同じ被注意児童群内特に◎印で回答した者、即ち学業には特に重点を置いて注意を与えたものと然らざる者、即ち○印で回答したものに分けて各群児童の過去二乃至三年間の学業成績の変化を見ると○印群よりも◎印群の方が成績の上昇率のよい事を見出した。

この事から保護者の教育的関心の方向はその児童のもつ個人的問題（主には短所）の方向に可成り規定をうけるようであり、又逆に保護者の教育的関心の方向によって児童のもつ問題の方向を変化せしめてゆくのではなかろうか。

我々は今後学業以外の各項についても保護者の教育的関心の方向の規定因子の追求を行い、上述の仮説の妥当性の検証を試みたいと思う。

家庭の養育態度と児童のパーソナリティ

平沢良助

一、問題

パーソナリティの形成において家庭環境要因の重要性については暫々論ぜられて来ている。この家庭環境要因のうち、実質的要因の一つたる「家庭の養育態度」をとりあげ、これが児童の現在のパーソナリティをどの程度規定しているか、という点を明かにしようとした。

二、方法と手続

家庭の養育態度の調査方法としては、青木誠四郎氏が公表されている「児童生育調査法試案」を、多少取捨して被験者の各家庭を対象とする質問紙法によった。

ただし、その結果によって構成される養育態度の六類型を、適度の統制、指導と自由を与える最も好ましいA類型と、干渉、統制にすぎるB類型と、干渉、統制のないC類型の三類型にまとめ、これらの三つの場合について考察した。

児童のパーソナリティを把握する方法としては、長島、山崎両氏作製の「適応性診断テスト」を用いた。

消極的ではあるが、「テスト」の10個の行動領域の各々において適応困難を示しているもの（50パーセンタイル以下の者をあてた）及び、全体の適応性において適応困難を示している者（55パーセンタイル以下の者をあてた。）を選択し、それらの者が就学前、就学後において、A、B、Cの各養育態度の下に育てられる場合にいかなる発生率を示すかという点を明かにして、問題に答えようとした。

日時は昭和二十五年十二月中旬――昭和二十六年二月中旬。

被験者は、北海道学芸大学函館附属小・中学校の小四、小六、中一年の各一組ずつ、計一一四名、うち、養育態度の調査の回答のなかった者を除いて計一〇八名について集計した。

三、結果

(1) 就学前においては、好ましい態度と指定したAの場合の方が、好ましからざる態度と指定したB及びCにおけるより、適応困難の発生率が、「テスト」における第三の「自尊感情」なる行動領域を除いては、何れの場合にも少くなっている。

然し、就学後においては、七つの行動領域と全体の適応性において、Aでは、B、Cの両者又は一方に比して多くの適応困難を発生させている。

(2) BとCとの場合を比較してみると、就学前においては、六つの行動領域と全体の適応性で、CよりBの方がより大きい発生率を示している。

四、仮定

以上の結果より左のような仮定が立てられるであろう。

(1) 就学前における家庭の養育態度のいかんは、パーソナリティの形成に相当な力をもっている。

(2) 就学後においては、家庭の養育態度以外の他の要因がより大きな力を占めて来る。

(3) 干渉にすぎる養育態度と干渉の極めて少い養育態度とでは、前者の方が、適応困難を発生させ易い。

第二次世界大戦後の日本心理学界の状況

——発表論文を中心として——

永沢幸七

本研究は、第二次世界大戦以後日本心理学界が如何なる経過をたどり、どのような方向に進みつゝあるかということについて、発表論文の数にもとづき統計的に調査するにあった。

資料としては、主として第二次世界大戦以後の日本心理学大会および応用心理学会において発表された論文によった。さらに参考のために一九二七—一九四二年までの間に、Psy. Abstract に紹介された邦人の業績も調査して、国内の第二次大戦以前以後のものとの比較を行った。これにより次のような諸問題を明かにすることを試みた。

(1)、本邦心理学界が論文発表数において第二次大戦以後どのような発展経過を示しているか。(2)、本邦の心理学界が第二次大戦以後発表数の上で研究別に見てどのような特長をもつか。(3)、本邦の心理学界が戦前と戦後とを比較してどのように変ったか。(4)、第二次世界大戦以後日本応用心理学会と日本心理学会とでは、研究内容においてどのような相違を示しているか。

〔結果〕 まず年代的消長からいうと、研究発表の数は、学界開催（一九二七年）年度以降一進一退を続けて来たが、大戦勃発の（一九四一）の年に近づくにつれて、研究発表が漸次下降の傾向をたどり、戦争初期までこれが続く、戦争後期すなわち、四四年、四五年、四六年の三年間は連続して中止のやむなきに到っている。

つぎに発表を研究部門別にみると Sensation Perception が最も高い比率を示している。又戦前戦後とを比較すると発表論文の数においては、戦後著しく増加しているが、研究部門別による特徴には、ほとんど変化を示していない。ただ社会心理の研究が増大したこと、Mental test がとくに激増したことだけが一つの変化といえる。

つぎに以上述べた研究部門別の特質と、Psy. Abstract に掲載された論文による研究部門別の特質とを比較すると両者はほぼ一致している。

つぎに、日本心理学会と日本応用心理学会とを比較すると、日本心理学会においては知覚感覚の研究発表数が著しく多く、応用心理学会の場合は、Social が多く、なっているのが違う点で、他の研究部門では似た特徴を示している。

参考までに、日本心理学会における発表数の多い者を順にあげると小保内虎夫、大脇義一、渡辺徹などであり Psy, Abstract に紹介された論文数では、黒田、城戸、小保内の順になって多少の相違が認められる。なお応用心理学会における発表論文では渡辺徹、小保内虎夫が上位を占めている。以上が学会における発表論文の数から見た、第二次世界大戦以後の発表論文を中心とした日本心理学界の状況であって、これは第二次大戦以後の日本心理学界の常識ともほぼ一致し、学界の傾向を客観的に示すものとして意義あるものといえよう。

「心理空間」なる概念の設定

斎藤幸一郎

Lewin によれば、行動は人と環境との函数として考えられる。そして、もし Lewin がやっているようにこうした人Pと環境Eとを含むような場面として生活空間を考えるならば、その空間の中で行動Bがどのようにして起ったかを完全に理解する事が可能である。そしてこの事は私も全面的に認めるものである。

しかしながら、B=f(P.E) なる函数式に含まれるP及びEは、各々独立変数として取り扱う事は出来ず、PとEとは互に従属関係にあるので、P・E・Bは何れも従属変数となってしまい、従ってこれらは Lewin のいう生活空間の内部に於てのみ互の関係が理解出来るようなものに過ぎない。即ちこのままでは、我々が客観的に独立に観察もし測定出来るような事象とは一応縁の切れた、従って応用的な価値の少い理論となって了っている。

そこで私は、これらP・E・Bを物理的地理的客観的な世界と結びつけるなんらかの途を見出そうと考える。

ここで E=f(P) を考えるとこのPは、Eを規定するようなPであるから、人の中のEを規定するような因子は、例えば生理学的な条件に基づく空腹というように、外部的に観察し操作し得るような Organism 0と見る事が可能である。そして一方 P=f(E) を考えると。例えばEの誘意性は、Pの欲求を言外に含んでいる事を意味するから、もし我々が、Eを完全に記述し指定する事が出来るならば、それは、その時の人の意識内容を全く規定する事が出来る。私はこうした意識内容の世界を物理的空間と区別する意味で心理空間と名づける事にしたい。

さて、我々が、Lewin の言う意味の行動Bでなくて、外部的に観察され測定された行動を取り扱う事とすると、このbは、0にあたえられた物理空間の刺戟場面に対する反応として生ずる場合もあるが、又、上述の心理空間に対する0の反応である場合も考えられるわけである。即ち0の反応としての行動bは、0内部に生じた心理空間の中の刺戟条件と、0外部に存する物理空間の中の刺戟条件との二つの刺戟条件として生起すると考えられる。そしていうまでもなくこの二つは互に独立変数であるから、実験的にその各々を恒常に保つ事も理論上可能である。なお又、前節で述べたように、この心理空間を規定するものは、やはり観察されるる0であるが、更

には、これと独立な外部条件即ち物理空間の中の条件という二つの変数の函数と考えられるから、個々の心理空間の内容を確定し予測する途も、理論的には開かれているのである。

Project method による集団の検査

岸　俊　彦

各種の集団が平和に共存するためには、お互に理解しなければならない。理解する方法を確めようとするのが我々の出発点であった。我々はその方法に「連想検査」と「T・A・T」を用い、補助として「態度調査」をした。

被検査集団には、朝鮮人高等学校、早稲田高等学院、中華中学校を選んだ。被調査者は各学校とも、上級生になってもらった。

連想検査は、四二語を刺戟語にえらんだ。その結果は「さいれん」「びんぼう」「じゅんさ」「ピストル」「てんの1」「かねもち」「かくめい」「だいじん」「ストライキ」「あか」「し」「せんどう」「アメリカ」の一四語に、はっきりした差が表れた。特に朝鮮人学校の集団では「ストライキ」「かくめい」に殆んどが、好意的反応をし、嫌悪的反応をする者が一人もいないのは注目に値する。「し」を、日本人は死の意味にとり、中華、朝鮮の集団は「詩」の意味にとる者が多い。

T・A・Tの Data は未だ少数しかないので充分ではないが、Project した人物が、貧乏人であり、それが、社会的活動、政治活動により幸福になるという者が八名中六名もいた。

又、眠りから醒めることが直ちに、階級的自覚の意味に転化する反応が彼等に共通に見られた。

態度調査は、集団の傾向を見るために、最も簡単な方法を利用した。

第一問、隣の人が脱税しているのを知った時の態度は、朝—日—中、の順に、援助—停観—密告となっている。

第二問、友達が間違った主義主張を持っている時の態度は、朝—日—中、の順に、discussion の程度が弱くなっている。

第三問、「道を歩いている時、ボールがぶつかったらどうするか」という質問に対しては、あまりはっきりした差がない。

以上三種類の結果を総合してみると、朝鮮人集団の特徴は、

① 自己中心的叙述連合が多い。（連想より）
② 道徳的、価値判断連合が多い。（連想より）
③ 殆だ実践的である。（連想より）

早稲田学院の日本人は、

① 停観的態度が多い。（態度調査より）
② 対象連合が多い。（連想より）

以上述べた集団特徴が発生した原因は、

① 経済的貧困。
② 少数集団である。
③ 抑圧され続けてきた集団である。

が考えられる。原因論は、他日にゆずるとして、当面の我々の目的である連想検査、及びT・A・Tによる集団の検査は妥当であることが分った。

児童生徒色彩嗜好調査の報告

細　野　尚　志

本調査の規模

本調査は色彩教育研究会会員に分担調査を依頼した。調査を担当して載いた会員三九名、調査を受入れられた学校三四校。本調査は季節差をも見るため調査時期を二回に亘って行った。従って、第一回調査、第二回調査の総調査人員は延べ三五、〇〇二名中、小学校延べ二五、五四九名。中学校延べ九、四五三名、総調査学校数は延べ五四校中、小学校延べ三七校、中学校延べ一七校であった。

調査学校の分布は、北海道から九州までの殆ど全域に亘っている。

本調査の目的

児童生徒の色彩に対するすき、きらいの傾向と、それが年令、性別、地域差、季節差などによる変化を調査し、教育上必要な統計を得ること。

調査の方法

一、調査条件

(1) 第一回調査を昭和二五年七月、第二回調査を昭和二五年一二月とす。
(2) 一定の調査試料を用うること。
(3) 調査時はなるべく午前中とすること。
(4) 天候はなるべく晴天の日をえらぶこと。
(5) 明るい教室内で調査すること。
(6) 被験者の精神的、肉体的平静時をえらぶこと。
(7) 学級ごとに調査する。被験者と試料との視距離はなるべく近く保つこと。

二、調査試料

(1) 色彩教育用標準色三六色、各色片の大きさ 12cm×9cm 色片に番号を付す。
(2) 色片を貼る台紙は白色画用紙、大きさ全版二枚つづき。

三、調査の仕方

(1) 学年、男女別、氏名と、すき、きらいの色の番号を三つずつ書ける記入用紙を先にわたす。
(2) 試料を黒板に掲示し、よく眺めさせた後、すきな色、きらいな色を第一位、第二位、第三位の順に記入させる。

四、調査票の整理

(1) 調査票を学年別、男女別に集計し整理した整理表一組を色彩教育研究会に送付して戴く。

(2) 各調査担当者から送られてきた数表を更に色彩研究所に於て集計し次の結果を得ることになった。

調査の結果

一、年令発達及び性別と色彩嗜好

(1) 男女による嗜好傾向差が割合はっきりしている。

(2) 学年別集計によって年令発達による変化の傾向がよくみられる。

(3) 色彩嗜好傾向を色相別に見ると、小学校では赤、赤紫、黄、青の色相が多く好まれる。中学校では、青、赤紫、黄の色相が多く好まれる。

(4) 純色系、濁色系別に見ると、小、中学校とも純色を多く好み濁色を好まない。

(5) 明色系、暗色系別に見ると、小、中学校とも明色をより多く好む。

二、色彩嗜好に於ける地域差

(1) 都市と農山村の比較では両者の相関係数〇・九三五九となり、H. E. Garrett の段階によれば、相関度高く、従って都市、農山村による地域差は殆どみとめられないといってよい。

(2) 南国と北国の比較では相関係数〇・八三四二となり、H. E. Garrett の段階によれば相関度高く、従って南国、北国による地域差も殆どみとめられないといってよい。

三、色彩嗜好に於ける季節差

(1) 七月調査と一二月調査の比較では、小学校の場合相関係数〇・九八七七、中学校の場合相関係数〇・九六八八となり、H. E. Garrett の段階によれば、いずれも相関度高く、従って季節差は殆どみとめられないといってよい。

中学生における色彩好悪と環境・性格

杉田尚

一、調査の目的

中学生の色彩に対する好き嫌いの傾向と、それが家庭環境、性格と、どのように関連しているかについて統計をとる。

二、調査の方法

(A) 色彩好悪調査について

(1) 色紙　色彩教育用標準色紙　55色（タテ六・五cm　ヨコ四・五cm）

(2) 台紙　B₁紙

(3) 各色紙の配列は、無彩色の明度二〇から順に明度一〇まで、その後は色相順に赤、橙と左から右に配列し通し番号をつけた。

(4) 上記のような試料を北側に提示する。

(5) 用意された用紙に、学年、男女別、氏名、好む色を記入させる。（好む色は、いくつでもよい。）

(6) その際記入上の注意を行う。

(B) 家庭環境・性格調査について、

各学年毎に、担当教師が集り、分類する。。

三、被験者

葛飾区立立石中学校生徒六五二名。内一年男子一二〇名。女子一三二名。二年男子一三〇名。女子一一〇名。三年男子九三名。女子六七名。

学区は、区内の中心部に位置し、区役所、その他公営物を多く持ち、大部分は住宅地、一部商店街、工場街を持つ。

四、調査の日

六月。午前中のみ、晴天の日。

五、結果とその考察

(A) 各学年、男女別に好色総数に対する百分率を求めた。

(1) 各学年、男女を通じ純色を多く好む。又その他も清色が多く濁色を好むものはほとんどない。

(2) 各学年、男女を通じ無彩色の白（二〇）黒（一〇）を除いて無彩色を好むものは少い。

(3) 男女の傾向は似ているが差は認められる。

(4) 学年による差はいく分認められる。

(B) 各学年、男女別に家庭のふんいき、生徒の性格を明るい、中、暗い、の段階に分ける。

(1) 色彩調査と家庭のふんいき、性格の明い、中、暗い、の相関を取る。（学年、男女別）

(2) 相関係数＋〇・五六、信頼度係数〇・〇四で家庭との関係が出た。

(3) 相関係数＋〇・六五、信頼度係数〇・〇三五で性格との関係も出た。即ち明色を好む生徒は明るい。中明色は中、暗明色は、暗い。

(4) 色相との関係は、はっきり出なかった。

運針学習の研究

——構成要素の練習過程と成績診断への試み——

藤原勉

当実験は、運針学習研究の最初の試みとして、青木氏（註一）の手続に若干の変法を加え、高校生に於ける運針構成要素を、練習過程と相俟って各学年毎に比較検討し、併せて各 Case を蓋然的基準に照合して成績診断をなし、指導上の具体的指針を得んとするものである。

「被験者」F1＝48、K1＝156、K2＝45、K3＝57名（F—普通科、K—家庭科）で、五月二二日から六月二日に亘ってK1、K2の各実験群一組に継続練習をさせ、同一三日全校的に測定をした。

「材料」紅絹。長さ一米の所定の用布。

「手統」縫標と縫標間八〇糎を、五分間練習。
「整理」A、速度＝五分間に縫い上げた全長。B、正確度及均齊度＝〔針目〕－一通りの針目数（註二）〔歪〕－一通りの全針目数に対する、直線上からの脱逸針目数の％。〔齊一度〕－中央二〇針における表及裏目のM・V（註三）〔流れ〕－中央二〇針に亘る布の長さと、表裏針目の糸の長さの差。以上の記録を学年毎にまとめ、そのS・Dをもって段階点を作成、成績判定の基準とした。

以上の測定結果を結論的に要約すると（－図表省略－）一、一年間の練習の進歩は、一分間一〇・二糎（実験群では一一・一糎）と推定出来る。然し、二年と三年とでは何等進歩は認められず、一応、二年にて運針技能は固定するものと思われる。二、針目標準三糎に照合すると、各学年の％は低いが、実際的分野よりみれば、F1＝23.0％、K1＝55.7％、K2＝62.0％、K3＝56.2％、（註四）を示し、進歩の開きが認められる。三、同一学年のF生とK生に大きなHandi-Capがあり、その指導の重要性を物語っている。而して、三年の運針形態及二年の学級差等級風と相俟って、今後の主体的条件への課題を提供している。四、単に一般的傾向としてばかりでなく、個々の実態把握のため、優劣判定の蓋然的基準に対照して観察した（第一表）。この種類の方法はGuidance の見地から必要性大である。五、各構成要素の相関は、歪と齊一度以外は殆どなく（第二表）、この種類の成績評価は、各構成要素を分析的に測定し、綜合判定すべきことを意味している。

註一、青木誠四郎　小学校に於ける運針成績（昭和一三年）

註二、一針目三粍標準で練習している故、八〇糎間では、一三三目が標準針目数となる。

註三、齊一度の表・裏目の相関は、実験群一年 $\gamma=+0.3431$ で稍々低く、表裏目共に判定すべきことを示唆している。

註四、F1、K3は、運針指導を受けておらず、特に三年は、用布一切、他より借用して受験していることを附記する。

（昭和二六・七・八日）

Table 1　(Case Study)

番号	名前	速度	評価	針目	歪	評価	流	評価	齊一度 表目	評	裏目	評	総合	評価
15	淑子	231	正	224	12.5	劣	−0.8	正	..23	正上	0.25	正上	0.48	優
2	ひとみ	211	正下	129	32.6	正上	0.6	正	0.59	劣	0.65	劣	1.24	劣
35	ちよみ	220	正下	120	41.9	最劣	1.4	正	0.27	正上	0.68	劣	0.95	正下
27	フサ	222	正下	211	9.9	正上	0.7	正	0.36	正	0.41	正	0.77	正

15、淑子　非常に緻密にして均齊度豊かな、併し確実性のある縫い方をしている。然し針目は極端に過小である故この点に注意指導を与えれば速度は、自ら向上する。

35、ちよみ　非常に動揺性のある縫い方をしているのであつて、何よりも歪みなどの生じ易い不安定な運針を固定させる指導が必要である。

2、ひとみ　先ず運針形態などの是正に努めるが肝要。　etc

Table 2,　Carrelation (γ)

	速度	針目	歪	流れ	齊一度
速度		−0.02	−0.06	−0.11	−0.17
針目	−0.02		−0.08	0	0.13
歪	−0.06	0.08		0.10	0.50
流れ	−0.11	0	0.10		−0.09
齊一度	−0.17	0.13	0.50	−0.09	

勤労青年の適応テストに関する実験的考察

畔上久雄

一、問題　勤労青年の個人的社会的適応はどうであろうか。このために、与えられるテストは、如何に組織され、如何なる具体的問題で構成されなければならぬかを知るために、アメリカのベル氏（H. M. Bell）の適応テスト（Adjustment Inventory）を施して、その結果を、職業別、項目別、男女別に考察し、又被験者の内省を分析して、この種テストの構造及び性格を吟味し、現場訓練、職業教育、職業指導及びこの種テストの作製と、その実用化に資せんとする。

二、ベル氏の適応テスト（成人用）の構造　a、家屋適応（Home Adjustmont）b、健康適応（Health Adjustment）c、社会適応（Social Adjustment）d、感情適応（Feeling Adjustment）e、職業適応（Vocational Adjustment）の五項目毎に、具体的な問題が三二選ばれて混合配置され、全体で一六〇問の一系列をなしている。一般に「はい」の答が多いと不適応となる。

三、被験者及び実施方法　昭和廿五年九、十月知己、親類、近隣関係のものを被験者として選び、個人テストした。被験者は、一八才から廿五才までの男女勤労青年である。(1)、男、公務自由業三三名、男、事務関係四七名男、商業六名、男、工業二〇名、男、農業一一名、女、三〇名、計一四七名である。

四、結　果

1、職業別、a、商業に従事しているものは、比較的適応している。特に身体が健康であり、社会的に適応し、自分の職業にも適している。農業従事者は、社会関係にもっとも従順であり、工業技術者は、感情方面に安定している。これに反して、公務自由業及び事務関係者は案外不適応者が多い。

2、項目別、a、健康にもっとも恵まれ、社会的、感情的分野はあまり安定していない。自分の職業に対しては、無関心で、しかも不適応数が多い。

3、被験者の内省、被験者のテストの受方は、複雑で対立的、排他的、反抗的気分が強い。一面自覚的、建設的、積極的でもあり、やがて自己診断、発見ともなろう。この種テストの与え方は、個人テストとして、親しみをもち、真剣な態度で向う。テストの組織問題の構成には風格を与え喜んで自己評価の資料たらしめる。このテストの範囲は狭い。思想問題、交友、関係趣味娯楽及び将来の希望も入れる。広く、深く、被験者にも得心のゆくテストにする。男と女、農工商と公務自由業事務関係の各二大区分に応じた別個の問題も用意する。